くまもとアートポリス2000

総合記録誌

地域と対話，地球とネットワーク

ひとびとの参加と対話を通じて
地域の文化と環境を継承し
地球的な視野から
地域を見つめ直すことで
21世紀熊本のまちを創造する

くまもとアートポリス
kumamoto artpolis

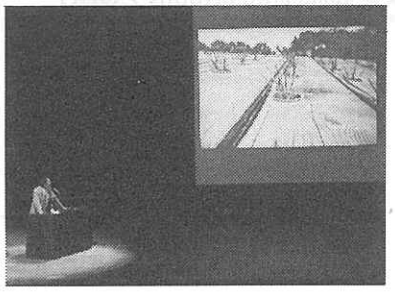
くまもとアートポリス2000実行委員会

くまもとアートポリス2000
総合記録誌

C·O·N·T·E·N·T·S

講演会

■講演会 3
■私たちのまちづくりシンポジウム 27
■国際建築フォーラム 81
■展示会 108
平成21世紀への「アートポリスアート巡礼」展／くまもとアートポリス展
■見学会等「演劇ホール」 110
■ビデオ展 112
■協賛事業 113
■くまもとアートポリス参加プロジェクト一覧 116
■くまもとアートポリス参加プロジェクト受賞作品 117
■参考資料：藤川隆夫
熊本くまもとアートポリス2000実行委員会会則 118
くまもとアートポリス実行委員会名簿・実行委員会専門部会名簿 120
第6回くまもとアートポリス推進賞表彰式
赤瀬川原平「ぼくの建築体験」



kumamoto artpolis 2000

講　演　会

■日　　時　　平成12年11月11日(土)13:30～16:30
■会　　場　　熊本県立劇場「演劇ホール」
■来 場 者　　500名

■主催者挨拶　　熊本県出納長　河野延夫
■来賓挨拶　　建設省住宅局建築指導課建築物防災対策室長　小川富由
　　熊本県議会議員　藤川隆夫
　　熊本市助役　後藤勝介
■事業紹介　　くまもとアートポリスコミッショナー　高橋靖一
■表　　彰　　第6回くまもとアートポリス推進賞表彰式
■講　　演　　赤瀬川原平「ぼくの建築体験」

赤瀬川原平（あかせがわげんぺい）
1937年神奈川県生まれ。
武蔵野美術学校中退。画家・作家。日本の前衛芸術の先駆的活動を行い、画家、イラストレーターとして活躍する一方、尾辻克彦のペンネームで作家活動も始める。
受賞:第84回芥川賞、第53回毎日出版文化賞特別賞他

ぼくの建築体験

赤瀬川です。後半にスライドで実際に自分が家を建てた体験をやろうと思うのですが、あまり自分で家を建てるということは、特に今の世の中ではなかなか難しいようで自分にとっても実際そうだったんですけれどね。昔はそうでもなかったんでしょうね。まず土地ですよね。土地がそんなに高くなかったし、土地を持つということがあまりなくて、借りる事が多かったですね。それが普通だったようなんですけれども、それで一応自分が建てた体験と、最初家を建てるなんて思ってなくて、何か家を保有するというのは非常に不遜な感じがしてですね、何か考えてなかったですけれども、最初ただある程度歳がいってどうせ家賃を払うならというんで建売住宅を買ったんですね。それで建売に住むようになって、それからまたしばらくして、そこが手狭になったというのがまず発端なんですね。それでボリュームとしてはその位で、そこは東京のはずれのどのくらいでしたっけね、3DKぐらいですかね、そういうお家で、庭がほとんどなくて、見晴らしはいいんですけれどもね。斜めののりだけが盛んにあって、庭なんてほとんどないんですけれども。それでそこがちょっとボリュームとしてはその位でいいけど、ぼくは家で仕事をしているものですから非常にやりにくいんですよね。仕事が。お客さんが来たときに生活空間とそれが分離していなくて、本当は事務所みたいなものを持ってやるといいんでしょうけど、それがいっしょにやっているものですから非常に場所さえ移ればいいんだけど、なかなかそうはいかなくて、それでどうせなら改造しようかということを考えまして、その数年、十何年か前から、路上観察学会で藤森照信さんとも仲間でしたからちょっと相談したわけですよ。それで見に来てくれて、前から改造というのは新築よりも大変だという話は聞いていたんですけれども、やっぱりそういうことになってこれは改造となると結局大変で、やるんだったら経済から考えた話が特にあるんですが、壊してから建てた方がはるかにいいぞみたいなことで、十年ぐらいでしたからね、僕がそこに住んで、それを壊すというのは非常にもったいない話で何とかしようと思ったんですよね。

それでどうせやるんだったら土地を探してやった方がいいというふうに進言されてですね、やっぱりそうなるのかと思って、確かに改造というのは労力は大変かかるから、自分の原稿の世界でもですね、文章を書いてそれを途中から変えるというのは、えらい頭から書いていくよりもはるかに時間、労力がかかるわけですよね。それでまあそうするかというふうに考えて、土地を探し始めて、まあ土地を探すのも大変だったんですけれども、なんとか土地を探してこれも取材と考えれば非常に面白くって、全然知り合いがなくてですね、家に新聞に入ってくるチラシにまず電話してみたいな事から始めたんですけれども、そういう場合は何といいますか

ね、いわゆるでき上がった魚でいうと切り身みたいなものしかないんですよね。僕なんかはやっぱりそうじゃないけどいろいろ経済的なものもあるんですけども、カメラなんかでも中古カメラで使えるやつの方がはるかにお得みたいなところもあったりしてですね、それからいったんだめなものを使いまわす方が面白いというところがあったりして、土地も、なんか切り身を買ってポンと何かというのはつまらない感じがしたんです。それ以外に方法がないものですからね、それであちこち連れて行って、向こうは、不動産会社の人は、お客さんですからすぐ車でいろいろ連れて行ってくれるわけですね。ドライブのつもりでいろいろ見たりして、大体その土地の状況が分かってきて、分かってくるといいますかね、こういう世界なんだという。

ただ不動産というのはやはり普段慣れない世界といいますかね、住んじゃえばそうは接しない世界ですね。最初に不動産、建売を買うときでもたまたま女房の親戚に建設会社の営業の人がいたんでやっと買えたようなもんで、そうじゃなければ何といいますか、不動産を手に入れるというのは、自分の身長以上のものを担ぐみたいな感じで、人生がかかっているといいますかね、全体重がかかっているというような感じが僕なんかはするんで、親戚の人がいてもいざ契約する時に書類があれこれ出てきて最後にはわからなくなるですよね。そして判子を押しているうちにだんだん怖くなって、自分が拉致されてどこかに連れて行かれるんじゃないかという感じになったんですけども、まあなんとか。僕は気が弱いからそうなんでしょうけども、全部悪人に見えてきてですね、住んでみてそれ以上の事はなかったんでよかったんですが。それで土地を探すとなるとよけいにそうで、それでそれこれやっているうちに近所の、前からそこは考えていたんですね。どこかで近所の話がわかる不動産屋と知り合いになって、それで、何か出物といいますかね、傷はあるけれども実質的にはこれはいいものだと、何かそういうものが好きだったんですね。

それでどうもそういうチラシでみているときには、切り身しかないということに気がついてですね、地元の不動産屋にどこか行ってみようと、駅の近くにひょいと入ったところがまあわりと面白い人で、ずっとその人と付き合って、二、三年探すことになるんですけどね、それでなんとか土地も決まって、これも大変なんですね、話をしだすと。それでそれまでにだんだん藤森さんに、今日の話は藤森照信さんが主人公になると思うんですが、やってもらおうという気持にはなっていたんですね。

そもそも家を建てるというところから始まったんじゃなくて、家を相談するというというところから始めたんで、路上観察をやり始めて数年目のころですかね。藤森さんが、あの方は建築史、歴史、建築史家で、そっちの方の人だということはもちろん知っていて、そんな知識の面白い話を路上観察の合宿のときにちらちら聞いたりはするんですが、まさか建てる人になるとは思ってもいなくて、ただ合宿の途中、何度目か、まあ路上観察というのは５人ぐらいメンバーがいまして、どっか宿屋に泊まってその町を観察して、夜スライドを映しながら、ああだ

こうだ言って楽しむという、一種の俳句の会みたいなものに似た所なんですが、そんな所でいろいろ雑談があって、いま藤森さんが、自分の郷里の茅野市に何か建てているという話をちょっと聞いてちょっとあまりピンと来なくて、へぇーっと思って、まあ地元だから何かそういうことでやっているのかなと思って、天井、屋根の上に熊の頭を乗っけるとかいろいろ言っているのがね、なかなかイメージがわかなくて、何だろうと思っていたんです。それであまり大したことに僕は思ってなかったんですが、できたというんで、山形の方にみんなで路上観察に行った帰りにそこに寄ってみたんですね。それは神長官守矢資料館というもので、処女作ですよね。見たら良いんですよね。ああ、こういうものを作っていたのか、それまで板を割る話だとか、土壁がどうのだとか、なんか聞いてたけど、やっぱり特に僕なんかは現物を見ないとわからない方で、現物を見て凄く良くてですね、皆さんご承知の方も多いでしょうけど、あちこちに紹介されてますけども、田舎ですね、茅野市という田舎のある一隅に立っている建物、何かそこにすとんと収まっていて、見たことのないような新しさはあるんですけれども、前から、何年も前からそこにあるという雰囲気があって非常に不思議で、それで僕等が見て非常に新鮮、何といいますか非常にモダンな所もあるんですね。

それでこういうものを作っているのかと思ってそれはちょっと感動したんですね。それがまず最初にありますね。それで家を改造するというんで藤森さんに相談して、後で聞くと藤森さんも土地をもし見つけたら、僕は金がないということも分かってますからどこか一番良心的なといいますか、実質的なハウスメーカー、どうしてもハウスメーカーの家というのは絶対値としては安いものですからね、僕も何となくそう思っていて、それだって自分の身長より背伸びした買い物ですから、藤森さんもそのつもりだったんですね。

それで土地が見つかっていよいよ、どうせならということで一番安い建て方で建てようということになったんですよね。そこからがだんだん踏み外していくあれなんですが、それで僕も安いのはハウスメーカーの方が安いんだけど、やっぱりつまらないというのが自分の中にあったんですね。それはどういうことかというと、やっぱり既製品というのはある予定調和の中にあるということがありまして、だから大量生産ができて安いというところがあるんですが、せっかく作るならというのがあるわけなんですね。まあこっちは絵描きで文章を書いたりいろいろ作ることが好きなもんですから、それとやっぱり新しいものを見たいというのが常にあるわけなんですよね。

それでそういうことになるかとだんだん覚悟が決まって、一箇所いいものがあると藤森さんに来てもらってここはどうかなとものになるか見てもらって、ああここは良いねということでただ、どうしてもよく言いますけれども家というものは建てるうちにエスカレートしてくるというのがあって、土地もそうなんですけれども、段々こう、いろいろな条件があるものなんですよね。まして東京の中でそうそう良い、良いといっても自分の目にかなったものがなかなか

なくて、それで最後に土地が決まりましてですね、そこに安いので最初、とにかくできるだけ安く作ろうという話で、でも建築家としてはどこかその見せ場がほしいということなんですよね。

それで板を床で見せようということになったんですよね。なるほどなと思って、そこら辺からは建築の世界で、僕なんか初めての感覚なんですよね。床で見せるというのはどういうことかというと、まあ藤森さんは建築史の人ですから、建物を建てる原理の所からの考えというものはいろいろ興味もあるし、経験として持って、知識もあるんですね。それでまず神長官のときも板を割って作る、のこぎり、近代の工具を使わずに、原子的な方法でやるということで、板は割り板で作っているんですね。板を割るというのはまた相当な技術で、昔の原始人では技術があったから、縄文の、弥生ですか、その頃の人にはあったけど、いまは近代工具が発達したおかげでそういう技術はほとんどなくなっているんですよね。それを苦労して再現したということでそういうものに、物自体に興味があって、僕もそういうところでは一致しているんですよね。板を見せるというのは、今の板ここの板も集積材といいますかね、それからフローリングというものは大体規格品になっているわけです。確かに良いんですけどね、そうじゃなくてちゃんと原木からひいた幅広の板といいますかね、それで見せようということになってきて、その前にうちの前に神長官の後、藤森さんはタンポポハウスという自宅を作っているんですね。住居としてはそれが最初で、うちが二つ目になるんですけれども、三作目としては本当は天竜の秋野不矩美術館というものを作ってまして、それが三作目なんだけれども実際に着工してできたのはうちが三作目なんです。住宅としては二つ目。そのときの経験がありまして、僕等はみんなでタンポポハウスを見に行ったんですがね、確かに床板そのものに感動するというのはあるんですよね。

それで僕はそれまであまり建築的、何といいますかものには興味はあるんですが、そういう建築というのは単に物のよさではなくて、歴史が含まれているんですね。その板を作るにはといういろんな歴史があった訳で、広い板というのは確かにいまの世の中で広い板というのは大変なんですね。今は要するにコスト優先の時代ですから全部規格された工場でいっぺんにザーッといっぺんにひいて、同じ幅、同じ厚さでやって、一種の工業製品になっていて、だからそうじゃないものを使いたい。それは僕もすぐ分かってですね、タンポポハウスの場合はいわゆる皮付きというんですかね、板のままの縁がこう直線じゃないんですね、片方は直線だったりするんですが。隙間の所に漆喰を埋めたりして、そういう都合よくいかないところを埋め合わせしたりしているところがむしろ良いんですよね。味があって、それで幅広い板の迫力というのがあって、それは分かるなというのがあるんですよね。それは建築、建物の中の物件としてのですね、僕は前衛芸術をずっとやっていて物そのものの迫力というのはいつも考えるんですけど、単に物がステージの上にあるというんじゃなくて、その家という空間の中にあるときの

迫力というのはまた違うんですね。それでなるほどと思ったりして。

それは藤森さんの郷里の茅野市にお父さんと小学校の同級生の、もうおじさんですよね、それがやっているカクダイさんという材木屋さんがあって、そういうことで可能になるんですね。今はそう勝手にこれをひいてくれといってちゃんとひいてくれるような材料屋さんというのはない状態らしいですね。もうどんどん画一化が進んでいて、だから段々、段々やりながら気が付くんですが、藤森さんがやっているのはそういうことにちょっと抵抗しながら、そうではない画一化ではないものをやろうとしているというのを、すごく段々わかってくるんですよね。それで板でやるということだけは決まって、外側はどうなるのかなと思って、頼んだ以上は藤森さんに全権でやってもらうつもりで、ただ間取りに関してはこちらからいろいろ、まず生活者にとって間取りが一番重要ですからね。それがあって、そこら辺ではああだこうだいろいろいったんですが、上がどうなるかわからないというのがちょっと楽しみで、半分怖いんですけどね。半分楽しい。

それで外側は最初は鉄平石で行くといってましたね。ちょっと意外な気がしてですね。鉄平石でどうなるのかなと思っていましたら、その頃、前から知っていたんでしょうけども藤森さんが鉄平石の切り出しの所に行って感動したらしいんですよね。鉄平石じゃないや、天然スレートでした。そこにスレート張りでその人が造った家があって、それを見せてもらったらなかなか良いんですよね。妙にモダンで、それで結構土っぽい力があって、なるほどと思ったんですが、ちょっと天然スレートで囲った家というのは、ちょっと鉱物質といいますか、ちょっと抵抗があったことは事実なんですね。結局鉄平石はその頃は土地も決まっているから、固まってきていまして、結局外側はやっぱり石を張るとなると相当荷重がかかるんで、コストもかかるからやっぱり板張りにしようということになって、神長官の場合は割った板でしたけれども、そこまでは凝らずに米松なんですね。米松なんだけど床と同じ板張りにするということで、ただそこまでまず決まる前にまず床だけまず板張りにしようと、後は適当に安く建てるということで、それを買出しに行くところから始まったんですね。材木をその茅野の材木屋さんに。

それで木造になるというのを途中から聞いてから、なんかほっとしたような気持ちがありましたね、僕は。それならいろいろ馴染んでるし。重みが僕等日本人にとってなんかちょうど良いんでしょうね。それで僕は木造かと思って、どうなるのだろうというんでまずあそこに行って、世界の木造建築という本をイナックスの地下にある、この建築関係とかデザインの本がいっぱい並んでいるところでこんな立派な本を買ってきて、もう一冊は北欧の木造建築だったかな。あっちの方に相当なものがあってそれで見ていったら、俄然木造のとりこになって、僕は木造といったらいわゆる和風を、ヒノキの柾目がどうのとかいうのが浮かんでいたんですけれども、そうじゃなくて向こうの方の例えばイギリスの方の割と童話風、童話風といいますかね、メルヘンチックな木造と漆喰の家があるんですが、それよりもっと古代のといいますかね、北

欧の方にある木造というのはもっと泥臭くて、土っぽくて凄い迫力があるんですね。あんまり技術がないですから、本当に木をザバザバ切って使ってあったりして、俄然木造のファンになってですね。それは自分でやった教育というのはすごく、家を建てる、気持の上では非常によかったと思いますね。自己教育といいますかね。

それで段々大体設計、外形も固まってきたような時に、それまでも路上観察に行くごとに何か建築があると藤森さんに案内されて、みんなで鑑賞していたりしていたんですけれどもね、その時には家を建てるというんでうちの女房とそれから藤森さんで、軽井沢のあたりに山小屋風の別荘を幾つか、まあ僕はすぐ名前を忘れちゃうんですけれども、ちょうどうちと同じくらいの規模になりそうだという、今ペイネ美術館になっているライトかな、ライトじゃなくて、誰かあの頃の時代の人の建築物があるんですよね。専門的なことはあまり皆さん当然知っているでしょうから。それで、なるほど良いなと段々、段々自分の中でもイメージができていって、それでその辺からちょっと待ってくださいよ、スライドで具体的にいった方が話もスムーズにいきますので、そういうことの前提が段々進みながらですね、家がこう具体的に始まっていったということなんですよ。

〔スライド開始〕

それで僕なんかは、これは人の性質にもよりますけれども、僕みたいな気の弱い人間はそうでもないとなかなか家を建てるなんて大それたことはできなかったと思うんです。これが模型なんです。こういうかたっぽがちょっと上がって、片流れではないけれども、こういうのをソルトボックスというタイプらしいですね。この向こうにいるのはうちの猫でミヨといいまして、まあ関係はないですけれども、窓があるあそこが玄関なんですよね。〔次のスライドへ〕

これはがけの上にありまして、これではちょっとわからないけれども、これは藤森さんの下であるオオシマさんという人が実質設計をやるんですよね。藤森さんは全体の基本方針をガンガン決めていくということで。やはり僕等はディテールを一番気にするんですよね。それは路上観察をやりながらいつも藤森さん自身も多分学んだ事だと思うんですけれども、こういう道路から下りた所にあるんですよね。それでそこに家があるから玄関が２階にいく訳なんです。

そういう話はおいおい分かってくるので、あそこにある黒い物は方向指示器。これを置いてみて日当たりはどうなるかなんか考えてみたりして。これは藤森さんはここまでやらないんですよ。あの人はそんなことはすべて頭に入っていてガーッと勢いでいく人なんですけれども、オオシマさんが細かくやっていってこのコンビが実によかったですね。それで僕もどちらかといったら丁寧な方で、藤森さんみたいな、僕等は藤森さんの力を乱暴力というふうにいうんですが、僕等は丁寧力を持っている方でそれで、オオシマさんは細かいことをやって、住宅の会社にも勤めていたものですから、そのコンビは実によかったと。それで台所なんかは藤森さん

は俺はあまり得意じゃないからオオシマ君に任せると言うんで、オオシマさんはそこを非常に、自分で自活生活もできる人ですし、細かくやっているんでその関係も非常によかった。住居としては。

それで藤森さんの自宅の場合は住居はちょっと台所をないがしろにしたせいもあって、奥さんとしてはちょっと不満があるみたいなんですが、それは内緒話なんですが。

〔次のスライドへ〕

これはオオシマさんがそういうふうに細かくやってくれている。それで茅野のここから藤森さんの実家はすぐなんですが、材木を買いに行こうというんで、そんなことやったことないんで、具体的にはどうなるかわからないですけどね、やったことないことって好きなものですから、行ってどれを選ぶかって、僕たちもわからないんですよ。輸入材の米松なんですけれども、何だか市場に行ってマグロを買うような感じですね。これを食べるというよりも、何か分からないんですが、買うということをやってみようというんで、それで床板材だけを何本でしたっけね。このままでは製材所に入らないんで真中で切るんですが、切ってブランと残るのがちょうど残りの重心の真中にいってて、とかそういう職人芸を目の当たりに見て段々のめりこんでいったんですね、その現場の面白さというんですか。〔次のスライドへ〕

これは小さい材木ですけど、飾り柱にするやつを倒木を下ろしてきたものなんですがね、そんなのを１本１本ひいて、ひく所からそもそもボランティアが始まって、要するに安く建てようということを藤森さんはえらい考えてくれて、僕の物好きな仲間を連れて行って、最初は日帰りだったと思いますね。茅野まで行って切って貰って、それを運んだりするのは仲間でやるんですよね。で、切り賃だけという、これは関係があってできることなんですが、それで干すのは藤森さんの家の裏庭、まあ田舎ですから土地が結構あるんですよね。そこに重ねて干してくれたりとか、そういうやり方で、だから本当に手作り的にそういうこと、機械的にできる所は機械の世話になってというやり方なんです。〔次のスライドへ〕

これは茅野の山の里山といいますかね、倒木を何本か引きずり下ろしてですね、それを構造部にはもちろん工事会社の、地元の建設会社にお願いしたんですがそこが全部やるんですが、飾り、いわゆる飾り柱といいますかね、そういう倒木の栗の木がほとんどでしたね。それをおろしてやったと。それで、いっぱい落ちているんですね。今、山というのは金にならないから人が入らなくてどんどんジャングル化しているようですね。栗の木というのは丈夫な木で硬いんですが、ちょうど数年たって、倒れて数年経っていると皮がぼろぼろになっていて、こういう物が使えるのかなと思うんですが、なたで削るとちょうどいい木の乾き具合になっていてというのがあって、これもここから作業にのめりこむのが始まりました。

これは茅野のそこの人にだけ入会権があって、倒木は下ろしてもいいということですね、だから本当はよそからいった人はいけないらしいですけれども、法的にはいけないけれども、山

にとっては木を下ろしてあげた方がいいんだという藤森理論ですね。一応合法的にやっているんですが、こんなことは初めてだったから大変だけど面白かったですね。大変は大変なんですよ。東京で原稿を書いたりそういうことで生活をしていて、要するに経済だけで考えたらこういうことは誰かにやってもらったほうがいいとということにはるかになるんですが、それじゃ段々つまらなくなってくるという、悪の道じゃないけれども、そっちにはまり込んでいくんですよね。〔次のスライドへ〕

こういう状態で倒木があって、これは落ちたら大変ですけれどね。上で切っているのは東大教授ですけれども、これは、それはちょっと無理だよと私は言ったんです。要するにあそこに登ってこう切らなくてはいけないんですね。あの人はやっちゃうんですよね。飯を人の３倍、誇張じゃなくて３倍食べる人で、それも３倍しゃべりながら食べる人ですから。ガンガンやっちゃうという、実際山に慣れているんですよね。こういうことは神長官のときにもやっていて、その前にも村人たちはしょっちゅうやっている作業で、切って下ろして、いわゆるミニ御柱祭みたいなんですよね。楔を打ってロープで引いて山をすべり下ろしていくんですよね。結局それしか、人力しか方法がないということで、段々原始の道に入っていく。〔次のスライドへ〕

それでこれが収穫した一部で、まだ全然ぼろぼろの皮付きのままなんですけど、それでここである程度乾かして。〔次のスライドへ〕

まずそこで大体図面はほぼできていましたね。それでその図面をオオシマさんが持ってですね、巻尺を持って山の中に入って行って木を測って、これは太さがちょっとどうかなとか言いながらですね、だから海に船で出て行ってこのマグロはどうかななんていちいち、そんな感じで現物感があふれた。これが藤森さんのやり方なんですね。あえて設計図を全部完成、もちろん構造的には完成しているんですけれども、それとやりながらどんどん始めていくという、それでここで玄関の４本柱、真ん中から入っていくんですけどね、最初は図面では等間隔だったんですが、ちょっとやってみてしまりがないからと言うんで、横に少し真ん中をあけようと、そういう細かい変更をどんどん現物で行くという、要するに目分量の世界というのは、今の建築の世界は違うんでしょうけれども、それは僕はすごく面白かったですね。
それはただ相当勇気がないとできないことで、要するに本番、リハーサル、テレビなんかでも本番の方が良いというのはすごくありますよね。テレビに出る人も良くそういうんですが、僕なんかも何度か経験して、リハーサルをやるとなんか硬くなって結局はおざなりなものになっちゃうというのがあるわけで、本番の現場勝負の面白さといいますかね。〔次のスライドへ〕

こういう具合にして干して、これもね、藤森さんのお父さんがもう80近いんだけど元気で、息子が何かやるというんで手伝ってくれてですね、雪よけ、あの中にちゃんと製材してひいた床板の方が入っているわけです。最初はこの程度だったですけどね、段々その藤森構想が固まってきて、外側を板張りということにしましたよね。結局、天井、屋根の上も一番表面は板張

りなんですよね。それで壁をどうするかということで、壁も米松でやろうというんで、どんどん注文が増えていってカクダイさんは、最初は床だけって言うんでせいぜい数本、３本ぐらいだったんじゃないかな、それをひいているうちに、注文がきてやるからいいんだけど、引きながら不安になってですね、これってこんなにひいて大丈夫なのとか、逆にオオシマさんのところに電話がかかって来たりしたという感じで、結局のところ、漆喰も使ってますけれども、家が板から、壁から、屋根から、外側から内側まで全部米松張りの、まあ一種の米松ハウス的なものになったんですね。〔次のスライドへ〕

これが外側に段々増えた、それは外側まで壁もやるとなったら増えちゃうわけです。これは幸いにというか、今の田舎には休耕田がいっぱいありまして、本当は貧しい風景なんでしょうけれども、なんか今の世の中逆転していてですね、でもそれを利用させてもらって干させてもらって、これで結構材木泥棒がいるからとかそういうことでね、大丈夫かななんて、その辺から施主としての恐れの始まりあるんですけれどもね。人ごとなら良いんですけれども、やはりそこが面白いですよね。建築の世界というのは、人ごとではない。特に施主という建てる、建て主にとってはそれは単なる美学とは違ってくる面白さなんですね。怖さと面白さ。本当に面白いものというものは怖さが同居しているものだと思うんですけれども。

それで、これはうちでその頃まだもちろん建売に住んでいまして、そこでなたで、要するにはつるのは全部施主でやってくれとという藤森隊長からそういう命令がきて、それで忙しい、嫌いじゃないんですけれどもね、忙しくて時間がないなとか思いながらですね、ただやりだすとはまっちゃうんですよね。そうすると人間の仕事って考えているときにはできなくても時間なんて隙間はいっぱいあるんですよね。ですから分子の隙間みたいな所にまた分子が入るというような感じで、仕事片手間に、むしろ片付けてですね、ガレージ、これは幸い僕は車はやんないものですから、ガレージがあきっぱなしだったんで、ここは物置代わりだったんですけれども、そこでガンガンはつって、冬なんか雪が降ってこんなに着膨れしてやっているんですが、段々１枚、２枚と脱いでいって、自分自身最近、自分自身で男っぽさというものを自分に感じていなかったけれども、俺は男だななんて思ったりしてですね。これは暴力を振るうというのはですね、非常に気持がいいもので、これでそうですね10分ぐらいはつりましたかね。それで段々芸術癖がでてきて、すごく艶かしいんですよね。外側がぼろぼろだからよけいにはつって、なた目で段々白い木肌が出てくるというのは非常に気持のいいものですよね。それで僕が注意されたのはあまり丁寧にやるなということです。つい丁寧になっちゃうんですよね。それはありますね。職人さんでもどうしても丁寧にあげた所を見せたいということがあるわけで、藤森建築というものはそれに盛んに抵抗する部分があって、最初は職人さんの抵抗に出会うんですよね。それではつっている所ですね。それでやっているうちに段々材木にほれ込んできて、丁度たまたま10人ぐらいでやる展覧会があったんで、それにこれをリボンを巻いて出品した

りもしましたがね。芸術作品として、そんなふうに遊んだりした。〔次のスライドへ〕

これは、はつった後と混じっているかな。あんなふうに二股のものがあったりとかいろいろなんですけれども。〔次のスライドへ〕

それでやっと玄関用のと指定された４本できて大体幅がこれくらいだというんで、うーんこうなるかと、一応現場感を確かめている所なんですよね。〔次のスライドへ〕

それでいわゆる型どおり棟上とかが始まって、次をいって下さい。

これは仲間が手伝いに来てくれて、最初僕はこれはね、要するに棟上の日に下の竹やぶ、まあ庭というか、がけにあたる所の竹を刈るというんで、そこで仲間にきてもらって、その辺が縄文建築団と称するものの始まりなんですけれども、南伸坊君にも頼んで、僕は朝ちょっと、施主というのはいろいろ忙しいものですからね、お茶とかいろいろ用意していったら、もう棟は上げ終わったところなんですよ。それがちょっと僕は残念でね。仕事をやっているのにふらっと遊んでいる職人がいてですね、何だと思ってよく見たら南伸坊なんですよ。おにぎり顔のですね、この人は実はこういう扮装をするのが好きなんですね。いろいろな扮装をするのが好きで歴史上の本人として、信長の扮装をしたりしてそれで、面白がっていろいろな考察をしたりしている。ここで着替えたのといったら、これで家からこれできたというんですね。すごいなと思ってですね。電車は大丈夫だったのと言ったら、別にとか言って、改めて考えてみたらこういう職人さんが電車に乗るというのは不思議なことじゃないわけですよね。そういえばそうだけどと思って、そういうシュールリアリズム（超現実主義）がまた面白かったりするんですよ。〔次のスライドへ〕

これが藤森さんと南君。本当は普通のスライドの方がきれいに写るんですよね。近代兵器というのはどうも鮮度がクオリティーが落ちますね。便利は便利なんですけれどもね。別にけちをつけるわけじゃありませんけれども。〔次のスライドへ〕

仲間に来てもらってですね、やり始めたというわけで、その縄文建築団と称するボランティア素人集団、これについては後で話していきましょう。〔次のスライドへ〕

それで屋根なんですね。問題の屋根といいますか、一応ニラハウスといわれていまして、これは結局そういう呼び名になっちゃったんですけれども、神長官の場合は屋根は鉄平石だったんですよね。これは公共建築ということも多少関係しているかもしれませんけれどもね。それでタンポポハウスといわれる藤森さんの自宅の屋根に壁からタンポポを植えたということがありまして、これはどういうことかといいますと、僕等は路上観察をしていてやっぱり思わぬところに植物が生えて塀の隙間とかにこう木があったりとかですね。それから蔦が段々建物を登ってどこまで行くのだろうなんて話をしていて、最初は蔦がビルの何階まで行くんだろうという話から段々話が拡大してですね、それで例えば10階だったとしたら、10階からまたそこから植木に蔦を植えたら高層ビルを蔦で覆えるんじゃないかと、藤森さんが理論化して、理論

化というか、それをことあるごとに言うとですね、非常に人気がある、要するに新宿副都心緑化計画というんで、その辺が始まりなんですよね。

それであの人の理論によると建築と緑の、要するに建築物に緑を寄生させるという、共生というのはどうもなんかかっこよすぎるといいますか、欺瞞的な言葉なんで、本当はどっちかが主人でどっちかに寄生するんで、建物があってそれに緑を寄生させるというようなことをいろいろと、それで藤森さんの話は僕は聞いていたんですけどね。いよいよ藤森さんにお願いするというときに、東大で毎年夏に公開講座をやっているんですよね。そのときのテーマがちょうど藤森さんが緑の事が始まった頃で、公開講座でそれをやるというので、うちのものと一緒にそれを聞きにいって、それはすごくおもしろかったですね。

神の発生からですね、要するに日本というのはほっておくとすぐに緑が襲い掛かる、緑は敵だったというんですね。考えたらそうでしょうね。そういう物件を僕等も良く見るわけです。廃墟になった家にも緑が全部覆っていて、それで輪郭もわからないと、その物件が売れて刈ると思わぬ形が出てくる。だから、緑の恐ろしさというものは昔はほんとに敵として考えていたというのはわかるような気がして、そしてそれを刈り取ってシラス、要するに石を緑が攻め寄せてこないようにして柱１本立てていわゆる神の岩代というんですかね。その辺が人工構造物の始まりだということを言って、いろいろ説はあるんでしょうけれども、それはすごく面白かったすね。とは言っても緑がないと僕等はやっぱり、これほどの都市から緑がなくなるとほしいわけですよね。だから都市というものは管理空間なんですけれども、できるだけ便利にやっているんですけれども、人工管理が行き過ぎると息が詰まるというのはいっぱい経験する所で、緑の問題というものはやっぱりあるわけですね。それで副都心計画、副都心を全部蔦で覆うという計画、それは確かに見事だと思うんですね。

ずっと都庁なんかが全部緑で覆われていくとですね、絶対それが実現したら名物になってですね、例えばニュースなんかでは、では今日も副都心の緑のあれを見てみましょう。上から紅葉前線が段々降りてくるという、今日は30階まで降りてきました。ではまた皆さんさようならみたいな。そういうことがあると、まあいろいろと冗談にかませながら言ってね、それでビルのオーナーたちの会合なんかでそういう話をすると、みんな面白がると言うんですね。それはぜひやってくれというけど。うちのビルでやるという人はいないという。それはわかる、非常にわかる話なんですけれども。それでそういうことから講じてじゃあ俺がやるということから始まったのがタンポポハウスらしいんですよね。ですからそういうことがあるものですから、タンポポハウスは上が芝生ですね。上に松の木がちょんまげみたいに生えているという、あそこの場合はスプリンクラーだったかな。それでうちもなんか言い出すなとは思っていたんです。あんまり僕も前衛芸術みたいな事をやっているから、あんまりはいえないけれども、あまり目立ちたくないものですから、家もあんまり近所でそうなるのは、ひんしゅくを買うのはちょっ

といやだななんて思いながら何か面白いことをやりたいという両方があるんですね。

それで結局ですね、覚悟はできていたんですね。うちもなんかどうも今の藤森さんのあれからすると何か緑をということになるんだろうなと、そうしたら原平さんの所にはニラにしましたというんですね。えっ、ニラというんで僕はびっくりしたんですがね。要するに草が生えていて、草の中で一番強い、植物の中で一番強いのがニラだっていうんですね。それでその頃同時に藤森さんが研究していたのは、芝棟という農家の屋根の上に百合とかいろいろなものが生えている、僕はあれは自然に生えたのかと思ったら、やはり縁起物もあるし、装飾的なものもあるしそういうものらしいんですよね。

それで、そういうことをちょっとやりたいというのがずっとあるようで、それでうちにも芝棟ではないけど、屋根前面に芝生を植える。それは僕はね、オオシマさんと二人の間でああだこうだあったようですね。どうやってやるかという。僕は全面芝生にするのかと思ったら、それは無理で、防水とかいろいろな事があって無理ですね。結局は防水とかが無理だというのと、それとグリーンになっちゃうと要するに人工芝に見えちゃうんですよね。あの近代技術の発達というのは、例えばヒノキの柾目とかいうと、かえって人工の柾目のプリント貼ったのかななんて思っちゃうんですね。あの規則正しい面というのはなんか人工物に見えてきちゃうという逆現象があるわけで、芝生の場合は、それでカップをいくつか1000個近く埋めていくという、あそこの屋根の状態で、屋根でその上に工場の屋根みたいな波板で、あれを張った状態で一応防水、家としては完成していてその上に板を張って。〔次のスライドへ〕

垂木をのせてですね、波の上に１本ずつ垂木をのせてですね、〔次のスライドへ〕

それで板を張ってそれに穴をあけて、そこにカップを、植木鉢ですね、それを埋めていくという、この穴あけまでは工事会社がやってくれるんですよね。そこから先のニラを植えるとかは知らないと言うことになってくる訳で、そっからは素人の手で自分たちでやるしかない。それであちこちに仲間、編集者とか美学校の頃の昔の生徒とかいろいろ物好きが分かりそうな人にあれしてですね、〔次のスライドへ〕

最初はね、仲間だけだったんですけれども、頭に乗って、仲間の奥さんまで動員してどうも面白いのが変なことをやっていると言うんで面白がって奥さんまでやってきて、これはニラは僕の新潟の六日町にいる友達が畑をやりながら料理屋をやっているやつがいて、そいつがじゃあニラを分けてやるよと言うんで、1000 株ほど実際にはもっと多かったんですが送ってきて、それを道路でいろいろやっていて、これは何だと思ったでしょうね、近所の人は。この頃はまだ僕は住んでないから、住んでたらなかなかね、しばらくはやっぱり相当白い目で、変な建物ですから、白い目で、工事のやり方も変ですし、こういう素人がこう来てなんか新興宗教かと思ったんじゃないかと思います。僕だったらそう思います。なんかプロじゃないし、でも素人で、でも熱心に楽しそうにやっていてなんだろうという、それで通行人がすぐこれは何ですか

と聞くんですよね。それでニラですというと、ニラが何かにいいんですかと、たいてい人間ってためになることというふうに考えるんですよね。それでそれにいちいちちゃんと説明するのは難しいですから、藤森さんはどうもね餃子で大もうけした人がニラに感謝すると言うんで屋根にニラを植えるらしいですよとか言ってですね。僕はですね、さっきのスライドで屋根に一面に何かあるというと、すぐソーラー発電ですかねそれを思い出すので、最近の実験でソーラー、ニラソーラーと言うのが研究されていてそれらしいですよと、施主だって言うともう大変ですからね。なぜそうやるんですかという理屈を求めてくるんですよね。正論を求めてくる。これは説明できないですよね。面白くて興味があってやったことを、単に面白がりと言うのではないんですよ。要するに本当に面白いからやっているわけで、僕等にもわからないですから、まあ芸術作品というのは全部そうですよね。何でと言われても分からない。建築というものも半分関わっているものですから。いろいろと質問を、とはいってもむげに知らないとも言えないですから、餃子屋さんで逃げたり、ニラソーラーで逃げたり、そうすると不思議で人間って、ニラソーラーねー、っていうふうに全然わかってないけれども一応形として納得するんですよね。これが不思議でおかしくてですね。〔次のスライドへ〕

それでこういう具合に上にプラスティックの植木鉢、下にもう一重、いざ枯れたときに水を保水するものが挟まっていてですね、それでその方式で直前に決まったみたいですね。この方式が二人の中で。〔次のスライドへ〕

これが仲間の一部ですけれども、縄文建築団と称して、こういう具合に床を見ると、これは屋根なんですが、間にホースがずっといっていてですね、それがひねるとホースが出ることになっているが、これは今ひとつあれですね。ゴムと言うものはビニールですが軟質ですから、穴をあけていても自然にねじれていくんですよね。それで方向が思わぬ方に向いちゃったりとか、あるいは途中で癒着してまたふさがったりとかいろいろあるんですが。

それで一番右側に藤森さんがいてですね、その真ん中にうち夫妻がいて、左がオオシマさんかな、後に仲間がいろいろな人に来てもらったんですが、最初これはやはり南なんて忙しいのに手伝ってもらうのは悪いななんて思って、やっぱり日当を払わなければいけないかななんて思ったんですがね。オオシマさんは若い40代の人でね、別に友情でいいんじゃないとかいわれて、まあそうかなと思って、友情と言う事にしたんですよね。僕はそれはすごくよかったなと思って、いわゆるボランティアと言いますかね、お金を払っちゃうとこれは仕事になって、やっていることは全部経済の方に縛り付けられ、そういうつもりがなくてもそうなっちゃうんですよね。お金がないとなると自分の積極性がむしろ出てきて、これは趣味なんだということで、なんか仕事しなきゃ損だということになってくるんですよね。

また藤森さん、これもただシステムでいく訳じゃなくて、藤森隊長がですね、また人の使いが荒いというか、うまいんですよね。それで暇そうなのを見ると、君こっちのこれをちょっと

こう切ってとか、そういうことをやられて非常に力仕事の楽しみを、昔はみんなそれを当たり前にやっていたんですけどね、それが気持が良い訳なんですよ。次はいつなんていうことになってですね、あごだけ一応施主が終わってどこかいってビールを飲みながら飯を食うというのがこれが唯一楽しみで、これはご馳走ぐらいはしないと悪いですから、後は自主的に来てもらってということでやったのが、その縄文建築団と称する要するに素人建築団。プロは素人的なことをやってくれないしできないですから、素人業にかけては素人がやっぱり一段上ですから、まあ変な言い方ですけどもね。プロは素人業ができないんですよね。習字なんかでうまい字を書く人というのは、下手な字を書けといわれるとできないんですよね。それで子どもは当然下手な字を書いて非常に子どもであればあるほど、頭が人工管理、頭と腕が管理されていない状態のときは、実に妙な思いもかけない字を書いたり絵を書いたりして、それが面白いんですけどね。段々小学校に進むにつれて、いわゆる普通のうまい字を目指してくるんで、そこを何とか我々成人が、残された素人業を発揮しようという事が縄文建築団の段々芯になっていくことで。〔次のスライドへ〕

こういう具合ですね、ホースがいってこう、これはあくる年ですね。10月頃、11月頃に一応竣工したんじゃなかったかな。僕が住んだのが2月、3月だったんで、それがすんでからだったと思います。また緑が出てきて、まあしかしどうなるものかと思って、屋根の事がもう自分の中では知らん振りしていましたね。こんなものを作っちゃってという気はしたんですが、それと右にこれはちょっと穴がもれているんですよね。右がちょっとぬれてますよね。〔次のスライドへ〕

さっきのを横から見てこういう具合なんですよね。がけの下で、南側はまた下りているという、だから変な地形のところで、僕はそういうところが好きなんですよね。切り身じゃなくてそういう頭といいますかね、なんかそんな、なかおちみたいなね。それでいまはこれに手すりが付いているこれは工事途中のものですがね、もう今は4年経って大分家も板壁もくすんできてますけれども。〔次のスライドへ〕

これが家のソルトボックスの真中が中庭状になっていて、完全な中庭にしてしまうと、盛んに藤森さんに反対されてですね、我々、特に女房の方は中庭、まあこれは犬猫の問題もあるんですが、留守にするときにそこに放しておけばいいみたいなこともあったりとか、いろいろあるんですがね、中庭は湿っぽくなると言うのが藤森理論で、まあやり方によっては僕はそうでもないと思うですけどね、それよりもコの字にして前をどうせならやっちゃおうということで、デッキ状に伸ばしてですね、榜の木は元からあったものを残してという、ここは作業場になって非常に便利でしたね。それで大抵来た人はあそこでビール飲むのはいいですねというけど、やはり周りからむしろ見えすぎるんで、住んでからは実用にはしていない。まあ視覚的な実用と言いますかね。〔次のスライドへ〕

こういう具合でいろいろ変化が楽しめますけれども、今は植木をいっぱい置いたりしていますけれどもね。〔次のスライドへ〕

それで、お茶室なんですけれどもね。普通ひとつあって、藤森さんは嫌いなんですよね。畳がいやだって言うんです。これはいろいろ建築家としてのあれがあるようなんですけれども、どっかに余分な部屋が欲しいんですよね。せっかく作るんですから、必要な部屋だけじゃなくて余分な部屋が欲しいとなると、日本の建築概念ですぐ頭に浮かぶのはお茶室という、無駄だけど作品としての空間といいますか、なんか欲しくて、それでちょうどメインの仕事場、アトリエと称するんですけれども、その実際的には応接間に使っている18畳ぐらいの部屋、中間にですね、要するに玄関を入ったその２階の床のレベルに回廊、人１人いけるくらいの回廊を壁にぺたっと作ったんですね。それはこの片流れのここのところで途切れてあったんですよね。これは藤森さんは半分はギャラリーと称してそこに小さい絵をかけたりするんだと、まあ建築的にインテリアとしてそれは欲しかったんだと思いますが、それを突き抜けて屋根にでたら、屋根の上にお茶室を作ったらどうだろうということを、これは僕がね考えたんですが、それも考えたんだけれども、どうのこうのとかいっていたんですが、結局は実現したんですね。

それでこれが一応ある種縄文建築団の結晶みたいなものになっています。それからついでに説明しますと、家の前にガードレールがあるんですよね。車がもちろん落ちないために、それでガードレールというものはちょっと無粋なものですから、それを土でくるんで網でガードして表面に芝を植えたんですよね。芝が垂直に生えていくという、実際問題、垂直面がなかなか茂るというわけにはいかなくて、これは１年経っていない頃ですね。これもいろいろ苦労をしてですね、ただ土だと流れ落ちるんで、土を少し敷いて、要するに昔ののりのお弁当みたいに中に何かをひいて、また土をやって、また敷いてということをしてこうやって、網はステンレスの網でさびないようにしてあるとか、いろいろもちろん科学的といいますか、合理的には考えてあるんです。それで屋根の作業をするときに、あの窓から出て行っていろいろとやるんですけどね。〔次のスライドへ〕

それでお茶室の壁というか天井ですよね、壁と天井の案が２つあって、これでいくか、これは見本を作ってきたんですね、藤森さんが。これで全面にドーム状にいくと言うんですよね。もう１つは横細く輪切りにした割り箸、太い割り箸みたいなものがあって、それでいくかと、見せられるとこっちが良い訳なんですよ。それでただこれの場合はどうやっていいかわからないという、工法が決まってないというんですよね、自分の中で。要するに規則正しいものだったらある方法を考えればずっとそれでいくんですよね。接着ないしなんかで、ただこれはすべてが不規則ですから、接着剤でというわけにはいかないですよね。

これはどういうことかというと、藤森さんのイメージの中ではこれの外側から特に天窓に近いような灯り採りがあって、その灯りを通して天井、これ越しにこう隙間から光がくるのが、

そういうお茶室にしたいと言うんですよね。それで幼児体験といいますか、田舎で薪を積んでいますよね。備蓄しているまきが窓の上までいっちゃってそれを中からみると、晴れた日なんかはそこから光がくるのが、多分それが藤森さんのイメージに規定に合ったものだと思うんですけれども。それでどっちがいいかと言うとやっぱりこっちがいい。じゃあこっちでとにかくやろうという、これの場合は見本ですから横にするとぱらぱらと落ちてくるですよね。一応ボンドで接着してあるけれども、要するに点と点ですからね、不規則な場合は。これをどうするのかと言うんで散々苦労を２人でやってましたね。結局は糸で中に穴をあけて針金でつなぐしかないという、大変なことになってきて。〔次のスライドへ〕

段々それが固まりながら、まだ固まってないんですよね。だけどとにかく素材を手に入れようということで、この木は確か松だったですね。ヤニがでてきますが、それをまた何本か買って、自分等で、オオシマさんの弟がチェーンソーを使えると言うんでこれを切っている所なんですよね。それで茅野の材木屋さんには５、６回行きましたね、それから山にもそのくらい入りましていろいろ。〔次のスライドへ〕

こういう具合に何かあれですよね、ネギみたいにそばの薬味みたいな感じでいきなり買った材木を輪切りにしてしまうというのは、何かもったいないような気もするんですが、これを割って長い薪だったら大変なんでこのくらいですかね。このくらいの薪にしてそれが重なるというそういう構想の元に、段々だからイメージはあるけど工法は決まらないけどなんとかなるということで進んでいくという、むしろ自分をある種追い詰めていくと言いますかね、それはあると思うんですよ。とにかくなんとかなるということで。〔次のスライドへ〕

これがお茶室空間なんですよね。それであのように天じゃないけど一応灯り採りの窓がこうあるけれども、あれは最終的には見えなくなるんですよね。そこに最初は藤森さんはドームで考えたらしいんですよね。半球形のそれはやっぱり相当無理があるというんで、結局かまぼこ型の変形と言いますかね、かたっぽは壁にして、というふうにして段々それを変更してですね、糸を張ってですね、それも多分この現場で考えたんですよね。ドームはちょっとこれは無理だぞということで。

まあだから僕の場合の建築体験といったら特殊といったら特殊ですね。知った同士でそれからなんと言うかな、物好きと言うものがないとまずできないことで、システム化はなかなかできないということです。〔次のスライドへ〕

それでこういう具合にですね、最初針金をかまぼこですからステンレスの針金を張ってそこに薪を通していくと言うこれは大変な作業なんですよね。割り係、穴あけ係、針金通し係と色々とあって。〔次のスライドへ〕

ただこれが巨大な楽器みたいで、僕は感動しましたね。こうビューっとステンレスの針金が全部いってですね、最初の一列ぐらいはそれでやったんだけれども、これはちょっと工期が大

変だという事で、ここら辺はやっぱり東大教授でですね、やっぱりユニット化しないと工事が進まないということで、ここまではそれでいったんですけれども、あそこで針金を切ってあそこで止めちゃってですね、ユニットで長さを作ってそれに合わせて作ったものを現場に持ってきて現場でつけていくという、そうすると分業化が可能になってですね、少し工期が進む、それでも大変でしたね。壁塗りと、いまあそこに耐火ボードが貼ってありますよね、あの上に漆喰を塗るんですがそういうことを全部含めて、このお茶室の場合はさっき紐を張ってやっていましたね、あれがあそこまでが大工さんが、プロがやってくれたことで、うちっかわを全部素人でやって、オオシマさんが全部日記をつけていてですね、全体で縄文建築団、要するに素人作業がリンクにして200リンクかかっているんですよね。それでこのお茶室作業だけで100リンクが集中しているという、不思議なものですね、力が入るとそれだけの力がにじんでくるものですね。〔次のスライドへ〕

それからはこういう具合にユニット化が進んで、下でこのそれで段々、そして面白いんですよね。この薪も最初は斧で割っていたんですよ。そうすると斧というものはかなり進化した道具だからきれいに割れ過ぎちゃうんですよね。そうすると藤森イメージとやっぱり違うと言うんで、もうちょっと不細工に割るにはどうすればいいか。何か道具の発達を逆行しているようなもので結局は何と言うんですかね、たがねを木でくくりつけて、それで上からハンマーで叩くという、要するに無骨にやらないと、無骨な力強い線というのがなかなか出てこないという。あれは見ていて笑っちゃったですね。段々道具の進化を逆行していく有様というのは実に面白かったです。それでそういうこともまた面白いんですよ。みんなも面白がって馬鹿みたいだなとか言いながらやっていてですね。１つのユニットが、バッテラという、バッテラまだという声がかかるんです。下でこのバッテラと称するユニットを作っているやつがいてとか、いろいろとあって、これは大変でした。〔次のスライドへ〕

それで漆喰は固めに練って手で、もちろんゴム手袋をしてですけれどもね、塗っていくわけですよね。これもやっていくうちに丁寧にツルツルにやろうとする人間の習性があるんですよね。だから時々藤森さんが見に来てですね、もうちょっと荒くとかいった感じで、もうちょっと乱暴にいいかげんにやれという、逆ですよね、普通の工事現場とね。大抵はもうちょっと丁寧にやれというんですが、いいかげんにやれという命令が来る。〔次のスライドへ〕

こういう途中まで、大体できてきてその構造体の所は漆喰で埋めてですね、こんなにやり方でいいかなと構造体の、できてみるといいんですね、なかなか。それで、これは崖の下側から見えてますけれども、あそこまでだから灯りがくるところまであれできて、そこからは壁になってそれでばらばらとあれが壁にくっついて、あとは漆喰の壁になっていくということことで。〔次のスライドへ〕

それを外側から見るとこういう見方ってできないんですけれども、こういう具合になってい

るんですよね。かまぼこ型のあれに。道路からですね、お茶室で夜にここでやっているときなんか光をつけるとパーっと昔の赤外線ストーブというか、ガスストーブのホヤがありますよね、あれみたいにパーっと明るくなって火事かなと思うぐらいに妙な美しさがあるんですよね。〔次のスライドへ〕

これができ上がった、一応こういう具合になったわけなんですけれども、一応お茶室と称するからには、炉がきってあるけれども、まあやっていないですね。それでこれは写真だからあれですけれども、随分横に寄っているみたいですけれども、床柱と称するものが壁に斜めに壁に、これは本当はこう行くはずがいろいろ変更で、その柱を何かに使っちゃっていたのかな。藤森さんがじゃあ斜めにいこうと言うんで。床柱が斜めで壁にくっついちゃっている。板がこの壁から浮いてこう橋みたいにあるんですよね。それで向こう側に、菖蒲のかきつばたのね、光琳のあれみたいに向こうに活けたこともある。菖蒲を生けるとなかなか良かったりとか。これの高さもですね、とりあえず工具入れとかで、ビールの箱がありますよね。あれを酒屋さんから借りて、それにとりあえず板を置いていろいろ工事していたんですね。それで、さあ高さをどうするというんで、これが良いというんでその板の高さなんですね。オオシマさんはね、それはちょっと何センチか決めてくださいといって、オオシマさんはちょっと若いからね、丁寧派でセンチ、数字を要求するんですけれども、藤森さんはいやこれで、これを測ってやってくれと、この高さでとにかくいこうというんで、そういう目分量と、一応数字派のいろいろがあって面白かったですけれども。〔次のスライドへ〕

それで一応塗り終わってですね、我々が一応お茶をやろうといって、お茶会と称してですね、最後まで塗り終わったというところで、そうしたらオオシマさんというのが、学生時代あの人は鳥取の方にいて、あっちは結構男性でお茶をやる人がいるらしくて、オオシマさんも学生時代やっていたというからびっくりしちゃって、僕等は全然知らないんですけれども、一応最初のお茶会。これが一番良かったですね。

これ、失敗したのはですね、素材、薪がありますよね。それに皮付きのままやったんですよね。皮がむしろあった方がいいということでやったんですけれども、それが皮と木の間に、卵がいっぱい埋まっているんですよね。輸入材で。それが毎年というか、皮を食っていくんですよね。ガラッと開けるといつもくずが落ちていて、それを掃除してみたいなことで、皮を結局剥ごうとすると、ごそごそと、そして食っていない所は皮がむけないんですよね。最初にむいて置けばよかったんですけどね。それはちょっと失敗したな。後３年ぐらいは虫が落ちてくるんじゃないかなと思ってね。いろいろそういうことはありますけれどもね。〔次のスライドへ〕

これはそれからそうなってくると、家具を作らなきゃということにもなり、アトリエと称する応接間ですかね、これはまた藤森さんの裏の作業場、物置みたいな所で、これは実家の茅野ですね。また丸太を買ってですね、これ自体は椅子ですね。椅子とテーブルセットを作ったん

です。〔次のスライドへ〕

これも目分量派ですね。目分量で現物にチョークで設計してですね、これはテーブルの方、こういうボーンとした板があったんで、じゃあこれでテーブルを作ろうと言うんで、大体イメージの中にあるんですね。図面はいちいち引かないで。その頃やっぱり藤森さんが自宅の違い棚なんかを作っていて、それもね、良いんですよね。それで藤森さんのいうのはついプロを目指しちゃうんですけれどもプロは目指さないというのがあって、鉄則にしているらしくって、プロを目指しちゃうとプロにはかなわないし結局は２級品になっちゃうと言うんですよね。やっぱり素人でできることと言うんで、いまの道具をいろいろ使いながら、結構いい加減力を発揮しながら実用の、実用の方は裏側からボルトで支えるとか結構乱暴な事をやっているんですが、職人さんというのはそういうことを絶対それは腕の見せ所じゃないからしないんですけれどもね。僕等は素人なんでということで、機械の使えるところは使ってと言うそのいわゆるハイブリッドですね。机の縁を内側に、これが僕は感心したんですよね。〔次のスライドへ〕

これは机の裏側なんですよね。裏側で普通自然素材、厚い木というのはどうしても厚みを見せたくなりますよね。僕も最初は実体験がないものですから、そう思っていたら、それだとそば屋の机になっちゃうじゃないとか言うんですよ。それでなるほどと思って、素材を生かしたいけど素材をこれみよがしにするというのは何か品がないと言うんです。そば屋はそういうことになってるからいいんですけど、かしらとか自然素材そのままどうだ参ったかという感じであるものというのは、確かにそういう物があって、なるほどなと思って、どこかで人工の、しかも自然素材、１回隠すと言いますかね、そういうことです。

それで彼のこの机は本当感心しましたね。厚く見せない、机ってもちろん厚い物の方がどんとしたときの安定感というのはありますよね。それがいいんだけど、持つときに重いのとそれからそれを見せるというのはいやだからと言うんで、できるだけ内側に下を削り落とすという、中をえぐるために割れ目を入れてこれを叩いて落としていくしかないんですね。のみで一々丁寧に削るわけにはいかないんで、そういう工法、それまで考えてやって、次いってください。

結局、こうなるんですね。あのまきざっぽうを突っ込んで、丸い穴はドリルでぱっと開けまして、いい加減に削ったまきざっぽうを突っ込んで、それで間を楔でがんがん締めていくんです。最終的にはボンドを使えばいいけど、できるだけボンドは使わずに今はまだ使わずにやっていますけど、それで何とか実際に建ててそれは微調整して、平面を、水平を出していくんですけど、これがいいんですね。すごく。〔次のスライドへ〕

それでこれはうちのできあがったところですけど、幅広の板で全部米松ですけど、そこに置いて椅子と、これはそもそも建売の時にいわゆる西洋クラシック調の曲線のテーブルセットをなぜか買って持ってたんですよ。それもミスマッチでおもしろいことはおもしろいんですけど、何かつまんないんですよ。やっぱりせっかく作ったんだからこの部屋に欲しい家具というと、

藤森さんの中ではこうなったわけです。これはお客さんが来たときにここでいろいろお話しをするという、そういう机なんですけど。

それで余った削りすぎた柱が出てきて、変更があったりするものですから、それで物干しをやっちゃおうという、左の方が家庭菜園みたいなことをほんのちょっとですけどやっていますけどね。

これがランプですね。もうちょっとやり方を変えましたね。最初あの木は楢かなんか相当丈夫な木なんですよ。それは山から下ろしてきて、これはあれに使うから折れないように下ろして、東京まで運んで、最初はこれは鳥の籠みたいに中に白い卵があるという感じの照明にしたかったらしいですよね。何かそれをイメージすると、ちょっしたスケッチを見せてもらったりして、ちょっとしつこい感じがしたんで、このままでいいじゃない、と言って、藤森さんも結局そうなったようですね。それで自然に貼って卵が垂れているという感じになって、もうちょっと自然な線にしましたけどね。それであの柱をぶつっとぶち抜くときも大体目分量ですね。この辺でいいだろうということで、いきなりドリルをダダダッと入れていくんですよね。これはもうオオシマさんなんかハラハラして見てましたけどね。でも失敗したらとんでもないことになるわけなんで、そういう時の決断とか勇気とかいうのは非常におもしろいことなんですよね。むしろそれで良くなるということがあるんですよね。計算しすぎたもの、表どおりの計算だけの物というのはなかなかそういうものは出にくいということがありましてね。

さて、これがいわゆるアトリエと称する、あれが大黒柱で、これがあの柱はさすがに製材の栗なんですけどよく真っ直ぐなったなと思って、角をちょっと僕がはつったんですけど、あの向こうが僕の部屋で、全体のことは本当はお見せすると良かったんですが、今のこのガラス窓も本当は１枚ガラスなんですけど、ああいうふうに桟をあえて伊達の桟と言いますか、僕も桟を入れるのは雰囲気もあるし目が落ち着くというのは好きなんです。

昔は１枚ガラスなんて大変な贅沢だったんですけど、今じゃ当たり前で、むしろこういう桟を作って小さいガラスを入れていくということの方がはるかに贅沢で、人件費の問題があって、贅沢なんですよね。だけど桟があって外が見えるというのは目が落ち着くというか、ガラスがないと、桟がないと大きいガラスというのは何か不安なんですよね。意識まではしないけど、無意識的にどうしても不安を抱えているという感じがどうしてもしますね。だからこの辺にはすごくなるほどなと思って、それで提案したいのは、こうなると掃除しにくいんですね。大きいガラスはスキージーで１回ばっとやればいいんですけどね、だから桟が外れるといいななんてまた横着を、取り外しのできる桟というのはできないかななんて思ったりもしているんですが。〔次のスライドへ〕

それで１回、何度か人に来てもらって、お亡くなりになったんですが、白洲正子さんとその前ぐらいから対談で呼んでもらったりとか、お付き合いしていて、是非あの方には見て欲しい

というのがあって、そうしたらこれは格好良かったですね。フリーのシェフというのがいるらしいんです。料理を伺ってそこの家庭のレンジを使って料理をするというのがあって、それを連れてきて、晩餐会をやって、これが格好いいんですよ。要するにミスマッチなんですけど、こういう削り出しのテーブルも結局鋸で引いただけで、サンダーも掛けてないんですよね。そこにこういう銀の食器とかが並ぶと実にちょっとぞくぞくするぐらいの新鮮さがあって、これは良かった。それでお茶室、今日のスライドにはないんですが、うちのお茶室というのは失敗してですね、失敗というのはにじり口、要するに廊下に行って屋根がこうなっているからこの間１ｍぐらいの壁があるんですよ。だからそこに穴を開ければちょうどにじり口でいいというふうに考えて、そういうふうにしたんですけど、実際にはにじり口というのは地面から床一つ上がって入るから、人間の体として自然にこう入りやすいんですよね。だからいきなりストン、ストン、ストンというにじり口は非常に入りにくいという、やってみて気が付きまして、それで白洲さんが入口で、もうここまででいいですと言っていたんですけど、もう足腰大分悪かったから、でもやっぱり是非見て欲しいと思っていたから何とか入ってもらって喜んでもらえて、それはやっぱりうれしかった。それはあれだけの目を持った人に見てもらうというのは非常に嬉しいことで、良かったんですね。

それで、全体のニラハウスがどうなったかというと、次が確か最後だったと思うんですが。〔次のスライドへ〕

こういう具合にニラが満開になって、これが風にそよぐとひらひらとして、最初は僕はニラを植えている頃は、仕様がない、言い出してこっちも容認した手前仕様がないと思っていたんですけど、咲いている姿を見てから、ほっとしてですね、ああ、やっぱりやって良かったと思ったですね。これは良かったです。

タンポポハウスの方は、ちょっと油断した隙にタンポポが枯れちゃったようで、ニラはさすがに丈夫だというだけあって、今年なんか、もういいや、今年は１年もう完全に手を抜いて、それまで要するに美観のためですから、アブラムシがつく、防虫剤をちょっと上げたりしたからもちろん食用ではあまり食べる気はしない、それにこんな狭い所で１個１個が生きているから、美味しくはないと思うんですよね。だから、結構手入れしていたんですけど、今年はちょっとほっといてみようと、完全に今年はほっといたんですよね。それでもやっぱり生えてきましたね。ちょっと勢いがないですけどね。段々一年目に比べると少しないけど、でもそのぐらいが案外いいのかも知れないなと思って、スライドは一応それで終わりですね。〔スライド終了〕

だからちょっと特殊な例になるかも知れないんですけど、これは僕は非常に良かったのは、さっきも言いましたけど、要するにボランティアにしたというのがまずあると思うんですね。友だちの友情できてもらって、お金の作業ではないというか、完全な趣味にしたということが、むしろ面白さを引き出したと思うんですよね。それと施主としては、自分がなたを持って工事

をやったことで、例えば柱をはつるときも全部それを発注した仕事として頼むと、何かはつり具合に、有機的な仕事ですからちょっと文句が出たりするだろうと言うんです。自分がやれば文句の言いようがない。節がちょっとうまくいかなかったというのは自分の思い出にもなるし、ここは仕様がないんだよということに納得がいくと言いますか、その点は非常に精神衛生上良かったですね。だから作ってから僕は本当に疲れたけど、実に面白くてその後も楽しいんですけど、大抵家を建てたというと、疲れたでしょうと言われるんですよ。もう僕の知り合いの何とかさんなんかはもう白髪になっちゃいましたよと言うんですが、確かにこれをお金だけ出して発注、要するに経済関係だけの場合には結局何か手抜きはないかとか、いろいろチェックすることだけに気がいっちゃうんじゃないかと思うんですよね。だから僕の場合、自分がどんどんいつの間にか趣味の方に入っていて、自分で作っちゃったおかげで、そういうストレスっていうのは全然なかったというのは非常に良かったですね。

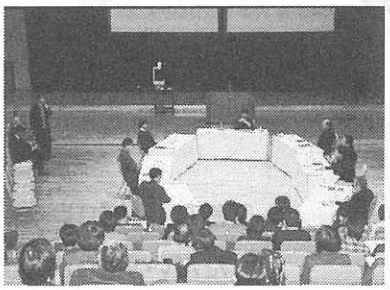
それで藤森さんに言わせると、これはスポーツハウジングという言葉がアメリカにあるんだと、要するに西部劇で開拓時代に家を建てると、原始的なツー・バイ・フォーですね、ばんと建てて、村で若夫婦が結婚すると皆で基礎を全部やって、屋根までやって、細かい所はその夫婦が住みながらやっていくというスポーツハウジングという、なるほど面白いなと思って、でも誰かに聞いてもスポーツハウジングという言葉はないらしいんですけど、分からないんですけど、でもその意義はすごくあって、面白くて、みんなその後もやりたくて、藤森さん次は何かないの？と言って、その後はまず天竜の美術館を建てると、これは公共建築ですから、大事業になると素人が入れないんですよね。藤森さんでも現場に入るときにはいろいろ手続が必要でということで、仕様がないんで、そこにアプローチのところの手摺りを、僕等が行って手伝いに行って、大理石磨きをやったりとか、ちょっとやったんですよね。その後、今度は藤森さんがまた新井である文化サークルのインテリア、こんなには広くないけど、この半分くらいの広さの中のインテリアをやるのに、また手伝いに行って、僕は段々楔師ということになって、楔を作るのが専門で、大体同じメンバーでプラスアルファー、南君とか、また終わってから酒を飲んで冗談言うのが面白いんですけど、作業しながらとか。

この間は最近は、伊豆大島に僕の生徒だった人の酒屋の息子がいるんです。焼酎を作っている酒蔵の、小さい酒蔵ですが、ほとんど従業員一人ぐらいでやっている。そこの工事事務所を作るというので、行って、これも一種部分の新築といいますか、それもまた面白かったですね。ナマコ壁の目地の、鉄平石をこうやって、瓦でやって目地が白く盛り上がっているんですが、それを目地のところを芝生を植えて、変な作業でしたよ。芝をこのくらいの細さに切っていくんですよ。それを目地に埋め込んでいって、結構うまくいって、まだ完成は見ていなくて、12月頃にみんなでひやかしに行こうなんて言ってるんですが、これは非常におもしろくて、そういうわけで本当に自分にとっては得難い体験でしたね。そうはできることではないし、

やはり半分人生がかかっているというか、体重がかかった仕事ですから、それだけに面白いといいますか、何と言いますか、普通芸術作品をいいね、というのはいくらでも無責任でも言えるわけですけど、体重のかかったことで言うというのは本当の本音というのが出てきて、それから一番僕が学んだのは、乱暴力といわれる現場、そこに立っての仕事ですよね。絶壁の上で仕事をするみたいなそれの気持ち良さといいますか、それで僕はつくづく思ったのは、自分にはちょっとそれが欠けているなと思ったのは、最初のうち建築雑誌がいろいろ写真を撮りに来ますよね。藤森さんはやっぱり自分の作品を、花を生けたり、そういう附属を踏んでやっぱり際立ってきますから、花を、丁度さっきも芭蕉を生けたのがあったと思うんですが、下の方に芭蕉が野生しているのがあってそれを切ってきて、活けるときになかなかいいんですよ。生けっぷりが。やっぱり生け花というのは乱暴力だなとつくづく思いましたね。僕なんか、貧乏性ですから、気が小さいから、何か捨てるのがもったいないんですよね。生け花というのは何かぐしゃぐしゃと自然なあれを取ってきて、ある１本を残して、捨てる、いかに捨てるか、捨てる技術ではないんですけど、それにかかっているという、ある種の乱暴さが輝いてくるということなんだなと思って、これは大いにこれからもまたやっていきたいなと思って、僕はもう家を建てられないですけど、といって仲間もマンションに住んだり、いろいろでなかなかチャンスがないんですけど、何か隙を見てはどこかに行ってちょっかい出したいなと思っていて、これはだから要するに僕はこの家に限らず、経済とか機能性をある部分で離れるかということをすごく考えて、というより極言すると人工管理といいますか、頭で考える思想とか、理想とか、そういうことをいかに離れて、現場、本当の自分の体から発する感覚とか、そういうものを掴むかということが結局一番大きいテーマになっている感じがするんですよね。

いろんな局面で現れてくるんで一言では言えないんですけど、こういう現場仕事の面白さはますます何か、文章を書くのもある種の現場仕事ではあるんですけど、具体性がこういう建築というときにはありまして、そうは機会がないけど、何か機会があれば今後も自分としてはやっていきたいなと思っているわけなんですよね。

ちょっと特殊な例かも知れないんですけど、一応全くの素人が家を建ててみた経験を見ていただきました。どうもありがとうございました。



kumamoto artpolis 2000

私たちのまちづくりシンポジウム

■ 日　時　　平成12年11月12日(日)13:30～16:30
■ 会　場　　熊本テルサ「テルサホール」
■ 来場者　　160名

■ 主催者挨拶　熊本県土木部長　岡部安水
■ 建築家による事例発表「私たちのまちづくり事業」

宇野求：湯前駅周辺開発事業
末廣香織：小国町立北里小学校屋内運動場建設事業
八束はじめ：砥用町文化交流センター建設事業
片山和俊：南小国町営杉田団地建替事業・南小国町営矢津田団地新設事業
小野田泰明十阿部仁史：町民文化会館建設事業(苓北町)
岡河貢：馬見原地区まちづくり事業(蘇陽町)

■ 公開討論会「これからの私たちのまちづくり」

モデレーター
曽我部 昌史
(みかんぐみ共同代表)

湯前町担当
宇野　求
(千葉大学助教授)

小国町担当
末廣 香織
(NKSアーキテクツ代表)

砥用町担当
八束 はじめ
(ユービーエム代表)

南小国町担当
片山 和俊
(東京芸術大学教授)

苓北町担当
小野田 泰明
(東北大学助教授)

苓北町担当
阿部 仁史
(東北工業大学助教授)

蘇陽町担当
岡河　貢
(広島大学助教授)

【曽我部昌史】

ただいま紹介にあずかりました曽我部です。今日の進行をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

まず、これから６つのわたまちの発表をしていただくわけですけれども、初めに私の方からこのわたまちがどういったものであるのか、皆さんの中にはわたまちといわれても良く分からない方もいらっしゃると思いますので、概要を簡単にお話しいたします。入り口でパンフレットも配られていたと思いますので、そういったものを参考にしていただければと思いますけれども、まずわたまちというのは、『私たちのまちづくり』というのを略してわたまちというふうに呼んでおります。これは先ほど土木部長さんからもお話ありましたけれども、『くまもとアートポリス2000』の中でも非常に新しい試みの一つであります。また、この新しい体制になってからのアートポリスのプロジェクトといいますか、アートポリス事業そのものを代表するような企画なわけです。

具体的にはどういうことかといいますと、例えば普通に地元の行政で学校とか、ホールとかを造るという場合には、専門の方と行政の方がいろいろ話し合いをされて、それはそれで非常に素晴らしいものができていると思うんですが、ものができるというプロセスで造られているのに対して、わたまちで試みておりますのが、実際に使う方々あるいは地元に住んでいらっしゃる方々と、もちろん建築、それを造る建築家の方々ですとか、とにかく関わってくるいろいろな人達がそこで対話をするということです。この地域と対話するということはアートポリスのテーマの一つでもありますが、議論をいろいろ重ねることによって、まずその場所に何を造るのか、あるいはどういったものを造るのか、そしてさらにそれをどこに造るのか、といったようなことを実際に使う人、そこに住んでいる人達と話し合いをしながら建築を立ち上げていくというプロジェクトになっております。

その考えていくというのは、いろんな形でのワークショップを通して、どういう可能性があるのかという議論が進められていくわけですけれども、今回６つの市町村がこのわたまちに参加し、それぞれの市町村に１人あるいは１チームの建築家のグループが参加をしておりまして、様々な形でそのワークショップが進められてきたということです。ちょうど、去年の今ごろかあるいはもう少し後ぐらいから今日までですから、およそ１年間続けられてきたわけですけれども、今日はその成果を発表していただきます。また、ワークショップと言われても皆さんの中には具体的にどういうことがされているのか、あるいはそれがどういうことにつながっていくのかということが具体的にイメージしにくいこともあろうかと思いますので、今日の発表を見て、私も含めまして、わたまちとはどういうものなのかということを理解していきたいというふうに考えております。

６つのわたまちの企画をこれから発表していただくわけですけれども、一番最初に説明して

いただくのが湯前町を担当された宇野求さんです。宇野さんはフェイズアソシエイツといって設計事務所を主宰されるとともに千葉大学でも教鞭を執られているという方です。

それでは宇野さん、お願いいたします。

【宇野　求】

宇野です、よろしくお願いします。

僕は湯前町を担当しました。それで手短にその概要についてお話しします。お話に入る前に、今日は湯前町がフェスティバルといいますかイベントがありまして、町の方、民間の方も役場の方もそちらからちょっと離れられないということで、非常に残念がっておりました。それで、町の方達の代わりも努めるつもりで、皆さんにこの１年間どういうことをやってきたかを発表させていただきます。

それで、わたまちは『地域との対話』というのがテーマになっておりますけれども、我々の担当した町は一言でいいますと、世代から世代へ何をこう伝えていくのかということをテーマにこの１年間やってまいりました。それで、特に本音の世代間交流というようなことを行ってきたように思います。この本音というところが大切でして、地域、小さいまちですけれども、その中にも子どもたちとおじいちゃん達、おばあちゃん達、おばちゃん達、そういう人達が必ずしも十分にコミュニケーションできてなかった部分があります。そういうことを、このワークショップと基本計画をつくっていく機会に取り上げて、みんなで議論してきました。

背景としては、湯前町は人口5,000人程度の遠くて小さな町です。熊本市からも２時間弱かかるようなところにありまして、実際問題としては、高校を卒業しますと若者がまちから出ていきます。それから人口もどんどん減っていますし、高齢化も進んでおります。そういった中で持続可能な、象徴的な意味あいとして小さな小さな駅があるわけですが、それをどのようにリニューアル、リストレーションしていくかというのが僕等に与えられたテーマでした。

それで町の方は、今申し上げたような状況ですから、非常な危機感を持っております。それをばねにして、皆さんで非常に熱心に活性化に取り組んでおられました。わたまちというこの仕組みを使って、そういったことに我々も建築家としてどういうようなお手伝いができるか、そういうようなことを考えて取り組んできました。

発表します成果というのは、主に二つございます。それは一つはワークショップそのものです。自分は、要するに東京の人間ですので、地域を活性化するためには人づくりが大切であろうというふうに理解しました。それで人づくりを主に考えて、ワークショップをまちの方達と一緒に企画して取り組んできました。それで仕組みづくりに苦心をしました。子どもから老人まで、我々は町外、あるいは県外の人間、つまり他者としてこのワークショップに参加しまして、自分は先ほど曽我部さんからお話をいただきましたように、大学でも教えていますから、また熊本大学の横山先生に大変お世話になって、熊大の学生さん達にも参加していただいてワ

ークショップをやってまいりました。

そしてもう一つの成果が基本計画案を作ったことです。これはまちの方達と老若、小さい子どもたちからお年寄りまで含めて、みんなで作った基本計画です。そういう意味で、カタカナでいいますとパブリックスケープ、公共の風景みたいなものをどう作るかということをみんなでやってきました。まちの方の言葉によりますと、先週発表会をしましたけど、21世紀の自分たちのふるさとを作りたいと、そういうふうに言ってました。

それではスライドを進めていきたいと思います。〔次のスライドへ〕

先週ちょうど町で成果の発表をしました。〔次のスライドへ〕

こういうふうに展示をしまして、モデルで展示をしてまちの方々に公開をしております。〔次のスライドへ〕

今日と同じようにまちの方達に大変多くお集まりいただいて、県からもいろいろな方が来られて発表会を行いました。〔次のスライドへ〕

やはり、スライドを用いて説明をしています。〔次のスライドへ〕

その後にディスカッションもシンポジウムという形で行いました。それで中学生の代表としてこのような方にも来ていただきました。彼女はワークショップでも大変に活躍した人です。それから熊大の横山先生にお世話になってシンポジウムが行われました。〔次のスライドへ〕

その場ではいろいろな議論がございまして、このようにお年寄りの方から子どもまでみんな手を挙げて、いろいろな形でまちの将来について語り合いました。〔次のスライドへ〕

これがこの１年間我々がやってきたスケジュールでした。昨年の12月に初めて町にまいりまして、都合10回、これが今日の県での公開シンポジウムです。その間、延べで約70人ほどの人間が町を訪れました。〔次のスライドへ〕

町にとっては中心市街地の活性化の基本計画という別の事業の報告書がございます。３月の時点で、昨年度のワークショップにその計画を加えまして、今年度のワークショップを実行してきました。それ以外に学生さん達に協力を得ていろいろなスタディやシュミレーションを行いました。〔次のスライドへ〕

そのワークショップが、話し出すと２、３時間かかるんですけれども、結論としてはいろいろなまちの方のご意見、それから我々他者の目として、いろんな意見を総合しまして案を作りました。〔次のスライドへ〕

これはまちの方々の、そのワークショップの中に出てきたいろいろな要望とか意見を分析した一覧表です。〔次のスライドへ〕

これを大きく捉えますと、概ね３案になるだろうということで、先月、町と協議しまして、このＡ案という形で基本計画をまとめることになりました。〔次のスライドへ〕

これがまとまった基本計画の考え方です。古い小さな駅舎がありますけれども、これは70

年ほど経っています。それで70年間いろいろなことが熊本、この湯前町にありました。それでみんなの想い出がこの小さな小さな駅舎に込められておるものですから、これをやはり壊すというのは非常に難しいというふうに判断しました。

それで、大正時代の末期に建てられたものなんですが、当時もっとも最新のデザインのものですから、21世紀の子どもたちに現在の最新のものを何かプレゼントして欲しいということでその二つを並べるという提案をしました。〔次のスライドへ〕

これがその考え方を示したものです。こちらはおばあちゃん、こちらはお孫さんですね。それぞれにとって大切なものを並べて駅前を作ろうという提案です。〔次のスライドへ〕

全体としては、駅舎をまず手がけていくわけですけれども、駅前全体を修景整備していく必要があります。それで森の中に行き着く山の奥の小さなまちというイメージで提案が作られていきました。〔次のスライドへ〕

風景的にいいますと、山が非常にきれいなところです。それから田園地帯も風景は非常にきれいです。しかし、まちは近代化の中で風景はかなり荒れている状態です。ですから駅前にその周りの風景を持ち込もうという提案です。〔次のスライドへ〕

幾つかここで湯前の良いところを紹介します。〔次のスライドへ〕

お茶畑です。〔次のスライドへ〕

これは焼酎のカメです。〔次のスライドへ〕

これは、神社。〔次のスライドへ〕

これは水路ですね。我々都会から来た人間から見ますと、いくつもの宝物という名前でいいましたけれども、こういう貴重な風景、そういったものがかろうじて残っています。それを丁寧に拾い集めて、駅前に小さく作ろうというのが今回の計画です。〔次のスライドへ〕

全体としては、現在はアスファルトである、ただの普通の駐車場になっているような駅前なんですが、それを20年ほどかけてまちの皆さんが木を植えていき森を作っていくという、そういうふうなことを考えています。〔次のスライドへ〕

これは内容に盛り込まれるもの、中心市街地の活性化の報告書の中に謳われたもので、今回の基本計画にも入れたものです。〔次のスライドへ〕

それがレイアウトされています。〔次のスライドへ〕

実は鉄道の駅とはいいましても、人吉まで１時間もかかります。１両の電車が１時間に１本走る程度です。使っているのは、乗降客が一日200人ぐらいです。ほとんどが高校生です。実際は道の駅という提案を町の方で考えておられまして、国道がありますので国道に、実際車社会になっています、そのための道の駅とシンボルとしての小さな駅をリンクさせて新しい環境を作ろうということを考えました。〔次のスライドへ〕

これはワークショップを通じて、まちの方からものすごく大きい、いろいろな要望が出てま

いりました。それを整理して、この計画の中に盛り込むべきことを整理したものです。

〔次のスライドへ〕

それはこういうふうに内容的にはプロットされております。〔次のスライドへ〕

駅前の広場が非常に重要でして、いろんな形でコミュニティのために使うようなスペースというふうに考えています。特に世代間交流を念頭に置いています。〔次のスライドへ〕

これが現況はかなり、ちょっと弱々しい景色なんですが、長い間かけて木を植えていって、森の中に着くという終着駅を作っていこうというイメージです。〔次のスライドへ〕

こういった提案はまちの方々のご意見の中から出てきたものを、我々はデザインの人間ですからそれをすくいあげて絵にしていったものです。

これが現況ですね。どこにでもあるような形になっています。ここも修景をしています。

〔次のスライドへ〕

アスファルトをもう少し暖かみのある色のものにして、駅前は緑を植えていく、電柱をできるだけ、ほんのわずかですけれども、地中埋設にして並木を植えていきます。

〔次のスライドへ〕

現駅舎についての説明がここに書いてあります。見ればわかるとおりです。

文化財的な意味あいはありませんけれども、まちの人にとってはとても大切なところです。なぜかというとみんな高校にここから通うからです。大人の人達はここから、年配の方達は戦争に出ていったこともあるそうです。そういった話を子どもたちにワークショップを通じて伝えていきました。〔次のスライドへ〕

子どもたち、今でも下校時に遊んでいきます。そういうところです。〔次のスライドへ〕

小学生達も駅員さん達に、社会科の勉強でいろいろ聞きに来たりもします。

〔次のスライドへ〕

七夕の時にはこういうものを駅に飾って、ひとつ、ひとつ子どもたちの思いや願いがここにかけられています。大人達はそういうことを知らなかったようです。ワークショップを通じてこういうことをやりましたので、子どもとのコミュニケーションもできつつあります。

〔次のスライドへ〕

これはモデルですね。林業のまちですから木造で作ることを想定しています。

〔次のスライドへ〕

これは先ほどお見せした図式ですね。〔次のスライドへ〕

ソーラーパネルの発電をぜひ付けるべきだという高校生の方の提案、環境を重視した形でまちをアピールしようという高校生の提案を受け入れて、ソーラーパネルを南側に付けて夜そこを光らせてみんなで集まれるようにしたいというふうなことを考えています。

〔次のスライドへ〕

全体としては非常にモダンなスタイルで、形はほとんど同じです。鏡を写したような形を考えています。それはおじいちゃんとお孫さんが、顔かたちは似ているんだけど、年をとっているのと子どもであるのと同じようなイメージです。〔次のスライドへ〕

木造のストラクチャーです。〔次のスライドへ〕

これはホーム側のモデルです。〔次のスライドへ〕

中側に付けるものについては、今後また検討を加えていきますけれども、非常に上質の球磨焼酎を作る酒屋さんがありまして、そういったものを並べていったり。〔次のスライドへ〕

それからとても古い良いお寺があります。そういったものをビジュアルに描いていくというような仕掛けも考えています。〔次のスライドへ〕

まちの風景として、つまりさっき申し上げたようなパブリックふうな、パブリックスケープとしてこういうものを作ってみんなで大事にしていこうという計画を案として先週報告しました。〔次のスライドへ〕

ここに至るまで、非常に長い長い時間をかけ、ワークショップをずっとやってきました。まちを半年かけて勉強しまして、みんなで勉強会をして、こういうポスターを貼って実際のワークショップしました。〔次のスライドへ〕

原案みたいなものをいっぱい作ってスタディをしました。〔次のスライドへ〕

まち歩きをして町を発見するというワークショップを、子どもたち、大人みんな集まってやりました。〔次のスライドへ〕

みんなが制作したり発表したりしています。〔次のスライドへ〕

町の若い連中ですね。みんなでああでもない、こうでもないといいながらやってきました。〔次のスライドへ〕

これは７月のものです。〔次のスライドへ〕

今度は８月のものです。〔次のスライドへ〕

そうですね、延べでだいたい百数十人の方がまちから参加されて、非常に楽しいワークショップを行うことができました。こういう中からいろいろな世代のいろいろなご意見を汲み上げていって、先ほど示したような基本計画に行き着いたところです。これはまちの方達の提案されたモデルです。一日半ぐらいのものなんですが、大変に上手いものを皆さん作られました。〔次のスライドへ〕

これが記念写真です。後でまたいろいろディスカッションがあると思いますけど、一応私の報告は以上です。

【曽我部昌史】

宇野さん、どうもありがとうございました。

引き続きまして、小国町のわたまちの発表をお願いしたいと思います。末廣香織さんにお願

いしたいと思いますが、末廣さんは福岡でＮＫＳアーキテクツという事務所を主宰されていらっしゃいます。よろしくお願いします。

【末廣香織】

小国町を担当しました末廣です。よろしくお願いします。

スライドよろしいでしょうか。

小国町の今回の『私たちのまちづくり計画』は、北里小学校という一つの地区の小学校の体育館が老朽化したために、それを建て替えなければいけないということで、その計画だったわけです。小学校全体の建物自体も30年ほど前に建てられまして、その内の体育館、この真ん中にちょっと小さいのがあるんですが、高学年棟、低学年棟に挟まれた体育館がかなり老朽化したために建て替えるということでした。〔次のスライドへ〕

まち全体の問題というよりは、その地域の問題であったということ、それからその地域が、今日もいらしてます熊本大学の桂先生が設計された木魂館とか、こちらのＡＳＯホールという音楽家の方が運営されているホールとか、かなり文化的な施設が多い地域で、これまで15年以上前からまちづくりという活動はもうずっとやってこられた、そういう地域なんですね。問題になるのは、そこの小学校をどうやって地域の活動につなげていって生かしていくか。それからこういった文化的ないろんな資産あるいはまちづくりのこれまでやってきた成果を、どうやって新しい建物に生かしていくかということが問題になったかと思います。

〔次のスライドへ〕

これは外にも展示してありますけれど、今回ワークショップを計６回、北里小体育館建て替えを考える会という名前の、ワークショップというよりは考える会という形で運営をしたんですが、その６回の割と実務的な会と、小学生を中心に体育館を考えてもらおうというワークショップをやったり、あるいは今度は大学生に参加してもらってひとつワークショップをやりました。

それで、左側から第１回、第２回、第３回というふうにまとめてあるんですが、最初の頃はかなり少人数で、地域の代表の方に集まってもらって話し合いを進めてきました。

〔次のスライドへ〕

最初の頃問題になったのは、体育館を作るのは良いんだけど、その敷地をどこにしようとかという話が全然決まってませんで、それがかなり議論になりました。これが現状の模型で、高学年棟、低学年棟という建物があって、その真ん中に体育館が建っているという状態です。

〔次のスライドへ〕

普通どおり、通常の小学校の体育館の仕様で建てるとかなり大きなものになりまして、低学年棟を全部壊して建てるとしても、高学年棟と同じぐらいのすごい巨大な小学校の体育館ということになってしまいます。ただ、ここの小学校は、現在の児童数が全部で90名ほどです。

割と近い将来50名というふうに減ってきますので、あまり大きな体育館を造ってもしょうがないんじゃないかという話もかなり出されました。〔次のスライドへ〕

いくつか案を出して、別の敷地を買い取って体育館を造ろうという話とか、真ん中に建っていた体育館を壊してこっちに建て替えるという話、それから将来的には現在の校舎も建て替えなければいけないから、それも建て替えるということを想定しながら、どういった敷地がいいかということを最初話し合いました。〔次のスライドへ〕

ただ、結局、住民の方々といろんなワークショップを重ねていった結果、そんなに大きな体育館でなくてもいいから、やっぱり今建っているところに小さめの体育館を建てるのが一番良いんじゃないかということで、それを検討することになりました。自分たちも建築家ですから、建築的にいろんな条件を検討しまして、それがおそらく可能だろうという結論で、第３回目ぐらいまでそういった話をしておりました。〔次のスライドへ〕

これは第４回のワークショップの様子です。第３回目まで終わって、だいたいそういう方向性が出たときに、この地域の状況で面白いんですが、３回まで集まっていただいた方はごく一部といいますか、地域住民が全員が集まるわけではございません。ですから、おそらく全部でも30名ぐらいの代表者の方が集まってきましたが、彼らから、「自分たちだけでこういったことを決めたのでは、なかなか他の人達に説明ができない。ぜひアンケートみたいなことをやって、全員の住民から意見を聞いてください。」という話がありましたので、アンケートをとりました。それをまとめたのが第４回目のワークショップです。〔次のスライドへ〕

これが第４回目のアンケートの集計ですが、いろんな意見が出てきます。様々な話が出てきますが、当初かなり個別にお話を聞いていた時、非常に大きな規格の体育館が欲しいし、それをいろんなことに利用したいというお話とか、あるいは、今、実は小学校の隣りにプールが建っているんですけど、そのプールの上に体育館を造ったらどうかとか、いろんな話が出てきたんです。どちらかというと、話が非常に大規模な方向に向かっていたんですが、実際にアンケートをとっていろいろワークショップを重ねていきますと、そんなに大きなものはいらないんじゃないかという声の方が実は大きくなってきました。あとお金のことをかなり心配される方が多くて、今までもさんざんいろいろなものを小国のまちは作ってきたのに、それ以上あまり大きな支出をして大丈夫なのかというような話まで結構出てきました。

そういったところで、ある程度全体の方向性としては、それほど規模の大きくない体育館ではありますけど、ただ近所に先ほどの木魂館などの文化施設がありますから、ホールとしてぜひ使いたいという話がありまして、ホール機能は持たせようということになりました。それから、それプラス地域の方々の集会の場所みたいなものは付けようなどと基本的なことが決まって後半に流れて行くわけです。〔次のスライドへ〕

その後、福岡の下山田にある、新しくできた小学校の体育館の見学などに行ったんですが、

地域住民の有志の方々がそういうのを勉強しに行こうということになり一緒に行ったりしました。〔次のスライドへ〕

その後行ったのは、小学生のワークショップです。これは、小学５年生、６年生に参加してもらって、彼らが実際に思い描いている小学校の体育館ってどんなのだろう、彼らのイメージ、夢を形にしてもらおうと最初に話し合ってグループごとに模型を作るというワークショップをやりました。〔次のスライドへ〕

ＰＴＡの方々にも参加していただきました。〔次のスライドへ〕

最終的にいろんな案が出てきたんですが、例えばサッカーをしたい、どうも男の子の間ではサッカーが流行っていて、女の子はバスケットが好きだとかという話から、バスケットとサッカーどっちもできるのがいいという話もありました。あるいは屋根が開く体育館に造って欲しいとか、多分福岡ドームなどの影響かもしれないですけど、そういうのが出てきたりして、いろんな楽しい話が出てきました。〔次のスライドへ〕

そういうことを一方でやりながら、もう一つ別次元のお話として、大学生を対象にしたワークショップをやりました。これは、たまたま木魂館の方で九州ツーリズム大学という全国的なレベルで、いろんなところからまちづくりをやられている方々を集めて、まちづくりの学校、勉強会みたいなことを毎年やられているんですが、そのツーリズム大学の開催している時期とたまたま我々のワークショップが同じ時期にやっていましたから、協力をして、そのツーリズム大学に参加されている学生さん達にも講評に参加してもらい、北里地区の2030年を考えようというワークショップをやりました。直接的には体育館の建て替えとは関係はないんですが、長期的な視野で、地域での新しい建物を考えていこうということを行ったわけです。〔次のスライドへ〕

最終的に学生さん達は、いくつか提案を出してきたわけです。例えば非常に高速道路が発達して、交通網が将来的に非常に発達した場合に、都市と直結したような住居が可能ではないかという提案ですとか。〔次のスライドへ〕

あるいは田舎にこういう集合住宅を作っていいのかという話もありましたけど、集合住宅兼作業場兼いろいろなものが集積したようなものを造ったらどうかという提案ですとか。

あるいは現在すでに行われていることのようですが、小国というのは水源地帯を持っていますから、下流で水を使っている大都市に、水の為に木をメンテするから、そのかわりにいろいろお金を出して下さいみたいな話をして、新しい自立した都市といいますか集落を考えられるのではないかというテーマがあったりしました。〔次のスライドへ〕

あとはずっと林業で生計を立ててきたまちですけど、その林業がだんだん衰退して上手くいかなくなってきたので、次の産業として、スギの林をまずは自然林に戻して、それで観光的なことをメインにしたまちづくりをしていったらいいのではという提案も出ました。

〔次のスライドへ〕

今のようなお話は、結局、まちの方々と小学校の体育館の話をしているときに、直接的な関係はなかったんですが、ただ、かなり、まちの地域の方々が、自分たちが将来どうしてここのまちに生きていかなければいけないのか、あるいはどうやって生きていくのが可能なのかということを考えていただくきっかけになったんじゃないかと思います。

最後、まとめとして、最終的に我々の出した提案というのが、右側の低学年棟、左側の高学年棟の真ん中に体育館を建てて、その側にミーティングルームあるいは小学校の卓球などに使えるような部屋を持ってくるという提案になりました。

ただ、現在ここは低学年棟なので、この建物が高学年にとって離れたら困るということで、この内部を改装工事をし、こちら側に地域開放できるものを全て集めるような提案になりました。〔次のスライドへ〕

これは何回か町の方と話している、途中段階の計画です。〔次のスライドへ〕

これは最後は割と細かい、どの部屋をどっちに持っていくかといったことを決めたあたりです。〔次のスライドへ〕

最終的にはこちらにあるような提案をまとめました。場所は現在の体育館の場所です。それから小規模なコンビニ的な複合文化施設と書いていますが、小さな建物ではありますけど、いろんな活用の仕方があるという提案が出てきましたし、それをサポートする組織もある程度まちにありましたので、複合的な小さな文化施設を造ろうということになりました。

それからどういう事業を利用するかということ、鍵の管理の仕方、それから図書室、パソコン室を地域開放に使おうということ、文化ホールとしては300人規模が適切ではないかという話、町民のスポーツクラブが利用したいというお話、ミーティングルームは小規模な集会所として畳敷きを可能にして下さいとか、あるいは季節や時間の移り変わりを感じさせる建物にして下さいとか、できる限り木造にこだわることにして下さいといった要望が出されました。〔次のスライドへ〕

これは最終案です。そういったことをすべてできる限り取り入れた形で、こちらとしては計画をしたわけです。〔次のスライドへ〕

右側はトップライトです。光をどうやって取り入れるかということで、季節感を太陽の光の移り変わりで表現しようと考えています。〔次のスライドへ〕

これは最後、小学校２年生に、途中段階で描いていただいたスケッチですけど、特に小学生は非常に夢を持っていまして、どうやって楽しい体育館を造っていくかということを考えていました。そういうことにできるだけ答えたいなと我々は思っています。やはり今回のワークショップを通じた一つの成果は、そういうふうにいろんな方に小学校の体育館を考えてもらうきっかけができたということです。最初はかなり、夢というのは大事なんですが、夢がある一方

で非常に、実際にお金の問題など現実の問題があります。そういうことをすりあわせながら、最初はかなり的外れな話が徐々に収束してきたということがあります。

それからもう一つは、この小学校の体育館がこういうふうに今考えられて計画されているんだよということを、こちらもいろんな形でインフォメーションを流してきましたので、そういうインフォメーションが十分行き渡っているということが、もう一つの良かったことです。あと我々自身もいろんな地域の方々と顔見知りになって、いろいろ事情が分かってきましたし、実際に建物を設計していくときに、そういう事前の準備期間みたいなものが設けられたというのは、非常に良かったのではないかと思っております。

以上で発表を終わりたいと思います。どうも、ありがとうございました。

【曽我部昌史】

どうも末廣さん、ありがとうございました。

続きまして、今度は砥用町のわたまちということで、ユーピーエムを主宰されてます八束はじめさん、よろしくお願いします。

【八束はじめ】

八束でございます。砥用町では11月３日、先週の金曜日になるかと思いますが恒例の文化祭というものがあって、400人ぐらいの方々が集められまして、書道であるとか、絵であるとか、その他いわゆる展覧会が一つにあって、もう一つは邦楽を含めた音楽関係の演奏があるという催し物がありました。その一角として、この私たちのプロジェクトの説明会が持たれたのでその再演ということでお話させて頂きます。ただその時にも少ないスライドながら25分かかりまして、今日は12分間ということなものですから、手短にお話をさせていただこうと思います。そのこともあって、今日はワークショップの模様その他、今のお二方がお見せになったようなもののスライドは持ってきておりませんが、会場の表に出ている展示のパネルにはそうした光景も出ておりますから、そちらの方をご参照いただければと思います。

我々のワークショップというのは、平成11年度で、私が出席させていただく前に一度、顔合わせ的なものを含めて６回でしょうか、それで本年度になってから４回ほど持たれて、合計10回、それにこの間のその説明会合わせて11回が持たれています。我々のプロジェクトだけが設計と密接にスケジュール的に連動しておりまして、平成11年度で基本設計、それから平成12年度で実施設計が今終わろうとしている時期なんですけれども、そういうことで走りながら一緒に中身を住民の皆さんと考えていくというような、大変忙しいペースでやることになりましたが、それだけお話が具体的に進めたのではないかというふうに思っております。

それから、熊本大学の桂先生の授業にワークショップを使っていただいて、私が12年度はちょっと個人的な事情がありまして、そっちの方が疎かになってしまって申し訳なかったんですが、昼間に砥用に行きまして夜に熊大に行って議論をすると、当然、熊本大学の学生さん達

も我々のワークショップ、砥用のワークショップに参加されていたので、多分委員さんが十何人、まちの方も十何人、それから学生さん達が20人近くと、毎回合計50人ぐらいの参加を得てやっていたというふうに思います。私の案の前に、熊大の方々が自作の案をつくられまして、これも表のパネルにありますけれども、そのレビューを住民の方と一緒にやった、というようなこともありましたし、熊大のチームは、砥用の計画のホームページを立ち上げてくれました。この間の発表会では私だけではなくて、そのチームの発表もあったわけですが、そこでダブルワークショップという上手い言葉を使っていましたが、砥用では住民のワークショップと大学のワークショップとが上手い具合に連動できたというふうに思っています。

じゃあ、スライドお願いします。

まず全体の配置を示す図面です。、ここが敷地で、全体はふるさと公園という位置付けになっています。この一角にはドームと呼ばれている雨天体操場の施設がありまして、隣に老人福祉センターがあります。そのまた隣の今グランドになっているところが、私たちのプロジェクトの敷地で、これが新しいセンターの配置図です。

まちの中心はここなんですね。旧街道で元は宿場町として栄えたようですが、今では残念ながらその面影はかなり薄れています。町の南、図面でいうと下の方には、非常に青々とした山が見える、川を通して山が見えるという景観です。川のやや上の方が現町役場で、川を挟んで体育館がありますが、先日のイベントを含めてまちの今までの文化行事はこの体育館でやられていたようです。町長さんのご説明ですと、砥用町は大変、体育行事の盛んである一方、これまで文化施設は遅れていたので、今度のもので整備をしたいということであったようです。砥用は、このあいだの国調で7,700ほどの人口ですが、年間に100人近くづつ減っています。当然高齢化も進んでおり、熊本一の高齢コミュニティです。ですから、将来の展望という意味では曲がり角に立っているコミュニティで、計画のことを考えていくとギリギリの話が色々と出てくるわけですね。そういう事情をできるだけ汲み取って計画を作っていきたいと考えました。

私たちの計画というのはホールが半分、それからコミュニティセンターみたいなものが半分という複合施設ですが、まず考えたのは、できるだけ小さなホールを造ろうということです。それは、もともと大きな建物のない町ですから、山の前にあまり大きなボリュームを作りたくないということが一つ、それからコスト的にわりと厳しいということが最初からわかっていたので、できるだけ小さなものにしておこうというようなことによっています。これについてはまたホールのことで後にご説明いたします。その件も含めて、私はプロジェクトの特殊な条件は、均してしまうのでなく、できるだけ取り入れようという考え方なんですが、もう一つの例は、実は敷地の一部が現状で４メーターほど、ほかのところより高いんですね。どうも町の方では全部フラットな敷地になおして建物を建てるというふうなイメージをお持ちだったようですが、

土を動かすのもお金がかかりますし、できるだけそういう地形的な条件というものは取り入れた方が、建物としては面白いし、利用の面からも有利な点が多々あるというふうに考えたんです。平面図で見ていただいて、大ざっぱにいきますと、ここがホールで、こっちの方がコミュニティセンター、つまり図書室、その他の部分ですが、今申し上げた敷地の条件を生かしたために、コミュニティセンターへは二階からもアクセス出来るようになっています。ワークショップで既存施設の利用のされ方をお聞きしていると、高齢者の多いこともあって、二階以上の施設の利用が著しく悪いんですね。しかし、利用者は全部の施設を一度に利用するということはなくて、何処かにターゲットを絞って来館されるでしょうから、このような処理をすれば階段を昇降することなく目指す施設にそのまま入っていけます。

平面図に戻って、ホールとコミュニティセンターの間に挟まれた所がロビー兼ギャラリーになるような、コミュニティホールと呼ばれているようなスペースで、入り口は正面と川沿いの裏側からぞろっと入れるようなことになっています。ワークショップで出た敷居の高くない施設をという要望に応えた積りですが、展示等が行われる時は可動パネルで独立な空間としても閉鎖できて、そうでない時は京都の町屋の通り抜けの庭のようにして、一連のスカイライトを設け、床も土のようなタイルと外部に準じた空間にしています。それが全体を左右に分けているわけです。

これが外観、ここのところが１階分高い、二階入り口につながる部分ですね。

〔次のスライドへ〕

先ほどいいかけたホールのお話をしたいと思います。これが川側からの景観なんですが、ここにいわゆるフライタワーと呼ばれている、ステージの上の吊りものを収容するボリュームがあるのがホール建築の通例です。ここをできるだけ低くしたかったということなんですね。フライタワーというのは、大体窓も何も開いていないコンクリートの塊ですが、それが山の前に立っているというのはどうも面白くない、目障りだというわけです。それで配置を横に向けたり、いろいろしてみたんですが、結局アプローチとの兼ね合いでフライを町側に向けはしたんですけれども、その高さを、普通21メートルぐらいあるものを３分の２ぐらいまで削りました。現地を歩いてみてこれなら景観上の障害にはならないと確信しました。実際に川の反対側が町であるといっても、まち並み一つ後ろに入るとほとんど見えないんですけれども、このフライノヴォリュームの壁には木の格子を組んでそこに蔦を這わせる予定でおります。

もちろんただ低くするといっても検討なしにそうするわけにはいきません。機能面の制約にはなるからです。所が最初のワークショップで、無性格なホールを造りたくないという意見が、委員さんの方から出ました、私も驚いたんですが、普通素人の方がそういうことはおっしゃらない。自治体の造るこういうホールはだいたい多目的ホールですから、あれにもこれにも対応できなければいけないわけです、演劇にも音楽にもそれから講演や何かのイベントにも対応で

きなければいけない。それで結局、最大公約数的な解決になりますと、このフライタワーも高くなっていくというふうになっていくんです。大体、日本の公共施設はそのようにできていると思うんですが、いろいろ議論していくと、どうも大がかりな大道具その他を使うような演劇の種はほとんどなさそうだということになった。町長さんにはオープニングだけ中央からプロの劇団を招いたりということをお考えですかと質問するとそういう考えはない、とおっしゃる。それじゃできるだけ低くしませんかということに話がもっていけたわけです。フライタワーのない、オープンシアターという形式もあり得るわけですけれども、そこまで行くと、逆に使用を限定しすぎるので、多目的でありながら、ある種の限定をしていくということをやって、ホールの高さを今のデザインで落ち着かせました。ワークショップなしだったら実現できなかったかもしれません。〔次のスライドへ〕

表の展示パネルの図面では、その中に、住民の方からこういう意見が出た、それに対してこういうアイデアである、というような説明書きが付ける発表にしましたが、細かくはそちらを見ていただきたいと思います。ちなみに、この平面図でグリーンで書いているところは、最初の与件にはなかったけれどもワークショップの議論でつけ加えた部屋です。といっても予算面からはトータル面積をどんどん増やすわけにはいかないので、削れるとことは削っていこうと、つまりさっきの言葉でいうと最大公約数じゃなくて、最小公倍数の考え方と申しますか、限定できるところ、無駄なところは削っていって、その分を新たな部屋として足していくというやり方をとりました。その最たるものがホールです。

今申し上げたよう用途の片寄りを考えながらフライタワーを普通よりずっと低くしたわけですが、それだけではありません。一つはホールの形式ですが、普通は長細いのをどーんととります。この点は熊大チームの案も皆そうで、どうもホールというと無条件にそれが出てきてしまうようです。それはそれなりのメリットはあるのですが、何処でもそのパターンというのはあまり面白くないと考えていたところ、それを動かす条件が出てきました。先ほどお話したように、砥用は大変高齢の方が多いコミュニティなんですが、町長さんから、あまりホールに段差があると、お年寄りには上り下りが大変であるというお話が出まして、これも私は「しめた」というふうに思いました。つまり、これは400数十の座席数ですが、そうした小さなホールであれば、長細いのではない平面形にすればかなり平坦にできるからです。逆にいえば平坦に近くするには奥行きのない、間口の広い平面にしなければならない。奥行きが少ないということはステージの人の顔がよく見えるぐらいの大きさになります。そうしたわけで扇形の平面が登場しました。この位ですと人形劇でも顔が全員に見られる近さです。勾配に関しては、最初は全く平坦でもいけるのではないかと言っていたんですが、ワークショップの委員さんには文化イベントの主催をしておられる方なども入っておられたものですから、そこでの話し合いで少し傾斜を付けるようになりました。扇形ももちろん別な意味での制約、例えばステージ上の

死角の問題なども議論いたしまして、演劇が少ないのであればそれはさしたる問題にならないとか、行われる行事によって形式上での適性がある、なしということを議論しながら、多目的なスタイルにしてはあまりない形式のホールが出来上がっていきました。

こちらがホワイエですが、面積のこともあり、ここを映画館のロビーぐらいに小さく縮めています。それを保証するのに先ほどお話したコミュニティホール（ギャラリー）のスペースでオーバーフローを吸収ということもできるという考え方としました。これも多分、有料公演が主になる都会のホールだとこういう平面構成はできないだろうと思うんですが、ここでは実質的な使い方を討議をする中でそういうプランが生まれてきたということです。

〔次のスライドへ〕

ホールの中ですね、フライタワーを取ったところが見える模型ですが、ご覧のように非常に緩勾配のホールです。非常に、一番低いところと高いところ１メートル30センチちょっとの段差しかありません。勾配がありながら平屋です。〔次のスライドへ〕

それとこれも住民の方との話の中では、砥用で環境というものが非常に大事だと、環境教育みたいなものを、いわば町税にしていきたいというようなお話が出て来ました。先ほど宇野さんのお話に出ていたソーラーパネルという話もそこでは出たんですが、今のソーラーパネルはコストパフォーマンスがもうひとつだということで、ここでは、領域冷暖房という考え方を打ち出しました。通例のホールの空調のように、上に巨大なダクトがあって、空気を吹いてくるというのは、騒音の元にもなりますし、それを一切止めてしまったんですね。床下に暖気冷気を通して、床そのものを暖める、床暖房を冷房にも転用し、温まるのは要するに人間の居るところだけで、上の方は無駄に暖めたり冷えたりしないという考えです。床だけでなく反射板のようなものまでそのための輻射パネルとして利用しています。従って客席部分の上に巨大な天井のスペースがいらなくなって、全体のボリュームを下げていくというデザイン上のポリシーにあった考え方だったと思っています。ホワイエでもカーテンウォールの下の方から少プールで冷却された風を取り込み、上に出ている塔から逃がすというような通風がデザイン・モチーフとなっています。この塔はぼんぼりのような巨大照明をも兼ねています。

あとは、砥用も林業が非常にメインの産業なものですから、出来るだけ木を使って欲しいという注文が出ました。といっても木を単に壁にべたべた貼るというのはデザイナーとしては安易にすぎる選択のように感じました。そのためにホールの客席屋根を集成材と鉄のテンション材による巨大なトラスで支えるとか、南側の高いカーテンウォールにやはり集成材のフィン（羽）を方立て兼竪ルーバーとして使うとか、ほかにもいろんな使い方をしています。このトラスも普通ならホールを横断する方向で梁はかかりますが、折角奥行きを圧縮したのですから、そちら方向にかけてあります。ステージュへの求心性を与えると期待しています。こうした事柄も、このプロジェクト特有の条件をデザインのモチーフにしながら計画をまとめていったと

いうところでは、他の事柄と共通しています。

【曽我部昌史】

八束さん、どうもありがとうございました。

続きまして、南小国町のわたまちを担当されました片山さんお願いいたします。片山先生は、ＤＩＫ設計室を主宰されるとともに、東京芸術大学で教鞭を執られていらっしゃいます。

【片山和俊】

紹介をいただきました、片山です。

私は南小国町を担当させていただきました。南小国町の計画は、杉田団地という既存の住宅地の建て替えです。軒数でいいますと56戸、敷地は新しく矢津田を加え２カ所に分かれるという計画です。それで、さっきの八束さんと同じなんですが、私の担当したところも非常に時間がなく、平成11年度中に基本設計を終えろということでした。多分去年の末からかかったと思うんですが、１、２、３月の３ヶ月で基本設計をまとめたので、非常に忙しかった、そういう日程でした。

というので、今日ワークショップは時間が限られていますので、それもまた八束さんと同じなんですが、外に用意したパネルを併せて見ていただければと思います。12分という時間ですので、計画案の中身だけにしようということにしました。ワークショップについては、前の方とほとんど同じような雰囲気で進んだというふうにご理解を下さい。

ワークショップは都合３回やりました。これからもう１回ありますので、４回になります。最初に行ったときに、地元の方と接して、ワークショップという言葉自体が似合わないなと思ったものですから、最初の回はワークショップを理解してもらうために、近くの団地を見学して、“ワークショップの練習”というのをやりました。どういうものかを気楽に知ってもらえたと思います。２回目にやったテーマは、“新しい杉田団地のどういうところを大切にしたいか”とか、もっと分かりやすい、“どんな木が好きか嫌いか”とかでした。一番身近な問題で、しかも僕は東京ですから分からないことを逆に教えてもらうという感じでワークショップを行いました。

確か今年の６月ぐらいに、まとまった基本設計についてご説明をしたワークショップも行いました。それからちょっと実は長く停滞がありました。今から思うともっとゆっくりやって良かったんじゃないかと思うぐらい、ずっと停滞をしておりまして、この12月から急にまた始まることになる変則的なペースです。実は、明日地元に行きまして役場と打ち合わせをしますが、今年度中に実施設計を終わるという具合で、急ぐのと停滞が交互に来るようなスケジュールが続いています。

これからご説明するのは、実際の設計の内容ということになります。実は６月ぐらいからずっと基本設計案を時々眺めておりまして、自分の中でもちょっと前のは飽きたようなところも

あって、何か少し見直せないかなというので、今ちょっと案を考え直しています。それがどんなところかということも、スライドでご説明をしたいと思います。これはまだ実は役場の方には了解を得てないことですし、住民の方にもまだご説明していないんですが、こう考えるのはどうだろうというのを、ここでご報告した方が面白いかなと思って、そういうスライド構成にしました。

どういうことかといいますと、先にちょっと言っておきますと、とても急いでやったワークショップであったことと、お互いに何でも言い合える仲になっていない間柄のワークショップだったものですから、実はあまり意見が出なかったんですね。ただワークショップの時に小さな紙に書いていただいたものがいっぱい手元に残っていたものですから、時々見返してみると、基本設計の時にはあまり見えなかったことが見えてきました。二つありました。

一つは車がもっと近づけないかということでした。車というのは人が歩くというのとなかなか合わないものですから、人と車を分離した案をつくっていたんですが、メモからは車がもっと近くまで来ないと暮らせないという意見が浮かび上がってきました。それから建て替えで、できれば新しいところへいったときに、元々の関係を、古い近隣関係を保った案にしてもらいたいという意見がありました。あまり多くない意見の中では突出してあったんです。それで、それを踏まえて自己反省して考えた案をここでご紹介します。

全体をわかっていただこうと枚数が多かったのですが、時間がないということで、ここの会場に来てから半分に減らしたものですから自信がありません。ちょっと飛び飛びになりますが、一応スライドでご説明します。

私のスライドはローテクで、色もなくて申し訳ないんですが。南小国町の今度の計画の敷地は、この杉田地区と矢津田地区という２カ所です。南小国の町は、２つの地区の間を流れる志賀瀬川の少し上流のこの辺に中心街があります。この杉田地区というところに今、杉田団地があります。それを２つの敷地に分散させながら建て替えるわけです。それで両側は、こう山に挟まれた谷間のような敷地でして、むしろ北の方から、小国の方から来ますと町の中心地区に対してちょうど門構えのように２地区がなります。〔次のスライドへ〕

それで最初にお話ししたのは、このゲート性ということでした。言葉自体が後から考えるとちょっと住民の方には分かりにくかったかなと思っているんですが。門の方が良かったかもしれません。計画地が町の門になる場所にあるというお話をしました。〔次のスライドへ〕

それから離れた２地区になるのですが、元々の住まいの方が新しい地区に行ったりするので、新しいところでも古いところが感じられ、古いところから新しいところが見える、そういう相互に感じられるような配置にしましょうというお話をしました。

それから、南小国町も杉の町ですから木を使うことに配慮しようということです。当然のことですが、これもお話をしました。〔次のスライドへ〕

それから今までのことを前提に、次に計画の方針をいくつか立てました。

まず、とても環境に特徴があり、裏側に山並みが両方とも控えていますので、そういう環境と合う、新しい団地の屋根、形態とはどういうものか、それをお話しました。

それから、ゲート性というか門のようなところに応える家並みとしては、屋根が平入りで国道に面するよりも、門的な強さを感じるように、妻入りというものを前面に押し出した方がいいということを提案しました。

それから、２地区に分かれるので、できるだけその２地区が相互に感じられる配置が良いこと、ここに杉田地区内の道路ができるんですけれども、通りに平入りで接すると建物で隠れて対岸の矢津田地区が見えなくなるので、なるべく妻入にして、住棟間から見えるようにしようということを提案しました。

それから敷地の際に、小さいのですが水路が流れているので、その水路を上手く利用したいと考えています。

それからこの団地では56戸の内、３階建て住棟にぜひしてもらいたいという要望がありました。敷地が棚田の細長いところなので、なかなか住棟がうまく入らなかったんですが、なかでも３階建てをどこに配置するかというのは難しい問題でした。いろいろやった結果、敷地の両側に分散させつつ、なるべくランドマークになるようなところにしようということにしました。

それから、これが重要なことの一つだと思うんですが、新しい団地を造ったときの車と人の問題があります。町からは１軒１台という車の台数を指定されておりましたけれども、実は、その台数はこの敷地に対しては非常に多いんです。駐車場がなかなか入らないんです。その上、住民の皆さんからは、もっと車を近づけるように、家の前まで来れるようにという要望がありました。〔次のスライドへ〕

人と車の程良い分離をしながらつなげるということをテーマにやりました。基本設計案ではここに書いた駐車スペース集約案しか実はできてなかったんですが、もう少し突っ込んで考えると、老人とか病人の介護とか生活食料の車による販売サービスということを集約した駐車スペースだけではなかなか難しいということが徐々に分かってきました。〔次のスライドへ〕

この敷地は、敷地が南北に縦長で、なおかつ眺めは東あるいは西という非常に意地悪な条件下にあります。杉田地区では、眺めは東に向けなければならないけど、陽は南から来ないと結構寒い。その両方を生かすには、基本的に住棟を東西配置にするしかなく、量的な面から積層型の住居ということになりました。

それから、こういう棚田的な断面をしている敷地なので、どうしても擁壁側は湿気る危険性が考えられます。従って、擁壁側に建築的な地形を作って、なるべく居住部分を擁壁から離そうということを提案しました。〔次のスライドへ〕

いろいろやってきますと、参加されているお年寄り等を含めて、やっぱりどうも和洋折衷といいますか、和室がどうしてもいるということで、むしろ和室が主体ならば、田の字型プランに近い形を採用して、なるべく家の中の広がりを作ろうということから、２階建てと３階建てのプランを作りました。これはあとでちょっと変わっているんですが。〔次のスライドへ〕

もっといろいろ要素があるんですが、大きくまとめると、配置の考え方は、ここに示したような内容です。けれども、実際に配置してみるとどうしても住戸が入らないので、町の方にお願いして、杉田の町道のルートを１本変更してもらい、迂回してもらうようにしました。それでようやっと敷地がある程度の広さが確保できて、両端に３階建てを、その間に２階をこう並べていくというようなことが可能になりました。だから杉田の敷地は３カ所です。それから対岸に矢津田があるという関係です。ですから、杉田では住棟配置を東西軸にして、道路から必ず相手の川と団地が見えるように配慮をするというのを基本といたしました。ただ、それではとても入らないので、こういうところに一部平入りで面している住棟を配置しました。〔次のスライドへ〕

できた最初の基本設計案がこのプランです。これは道路を擁壁の一番近いところに通しまして、それから駐車場と人の道をとり、住宅があるような配置として人と車の連続と分離を図っています。しかし、これを見ても住民の方から、まだ自分の家から車が遠いというような指摘がありました。〔次のスライドへ〕

同じ計画の矢津田の方は、南向きを基本にして、中心の広場から杉田の方が見えるような配置としました。駐車場はまとめて山際の一番日当たりの悪いところに用意するという計画を基本設計でしました。〔次のスライドへ〕

それが、この計画案です。〔次のスライドへ〕

これは住戸の一つのタイプですが、田の字型プランにして、むしろ割と広いテラスを作って、普通の都会の集合住宅と異なって、内と外の関係がもうちょっと一体感があるように、広いテラスと板の間が連続するようなプランとしました。外部階段で、ここで２階に上がります。１階がＲＣで２階が木造という区分けにしました。〔次のスライドへ〕

これが基本設計図の立面で、このへんがテラスのところで、上下に住宅が２軒あるということです。〔次のスライドへ〕

これは３階建の方でして、３階建はペアにして納めています。玄関から入って、普通のよくある和室をつなげるタイプですが、マンション風がいいという町の要望もあり、多少それを意識して作ったプランです。〔次のスライドへ〕

これもまあ同じように１層、２層がＲＣ、３階は木造と。〔次のスライドへ〕

その時できた配置の模型です。国道に面しまして、割と低い２階建が連続するような形で、３階建は一つ裏に控えているという構成にしています。それぞれ住棟間に視覚的なスリットが

あって、お互いの住宅地が見えるというコンセプトです。〔次のスライドへ〕

これも同じようなもので、これがこっちの向きが杉田になります。〔次のスライドへ〕

これがちょっと見直しをしたところです。もうちょっと立ち寄りやすい近隣のためのスペースを作るべきではないかと思ったことと、それから車をなるべく接近させられないかということを考えて、階段脇の屋根下に持ってくるように変えました。〔次のスライドへ〕

車が北側のここに入りまして、近隣の人がちょっと南側の屋根下で憩えるようなところです。屋根下の近隣スペースを渡って人の路地が住棟をつなぎ、車の方は道路からここに車が入りサービスするというふうにしました。〔次のスライドへ〕

それでプランを変えました。ここのところが人が通れる近隣の路地で、そこに車と人が憩える場所があるという配置構成です。〔次のスライドへ〕

それからできた立面図がこういうことで、若干、前案よりは印象的な立面になったのではないかと思ってます。〔次のスライドへ〕

これがそれでできた配置図です。車の道と屋根下を抜ける近隣の道、二つの道でできています。〔次のスライドへ〕

これも同じ計画の矢津田です。〔次のスライドへ〕

今お見せしました最終案は、これから地元にお諮りしてワークショップをやっていこうと思っております。

【曽我部昌史】

どうも片山さん、ありがとうございました。

続きまして、苓北町のわたまちになりますが、苓北町では小野田さんと阿部さんのお二方が一緒にやられております。阿部さんは、阿部仁史アトリエで活動されるとともに東北工業大学で教鞭を執られていて、小野田さんは東北大学で教鞭を執られていらっしゃいます。

それではよろしくお願いいたします。

【小野田泰明】

くまもとアートポリス苓北町についてプレゼンテーションさせていただきます。小野田と阿部でございます。よろしくお願いします。

説明する前に、私どものユニットのちょっと説明をさせていただきたいと思います。僕たちはほかのユニットとはちょっと違って、建築家と建築計画者と二人がチームを組んでやっています。それが切り離されて、こちらが前段をやって後半をやるとかという話ではなくて、相互にかなり乗り入れをしながら、時には役割分担をしながら様々なことを展開してきたと、それによっていわゆるソフトウェアといいますか、何を作ったらいいのか、住民とどういうふうにコミュニケーションを取ったらいいのかという話と、それをどうやって具体的な形に落としていくのかというような話を、両方かなり幅広い範囲にわたって、しかも分断せずにやれたので

はないかと。言ってみればわたまちが抱えているような、そういった難しい課題に何とか短い時間で対応できたのも、こういうふうなユニットを組めたからかなと思っています。

それで私たちは、ワークショップを全部で５回展開しています。最初に、ワークショップのシュミレーション、全体を３期に分けたんですけれども、最初の期をリソース確認期、その次が条件を確定する条件確定期、３番目がそれをデザインに落とし込んでいくデザイン検討期というふうに考えました。

先ほども、ほかの先生方がおっしゃっていましたけれども、ワークショップというのが何かというところが非常に分かりにくい部分もあるので、最初に町の役場の若い連中と一緒にワークショップを展開しました。これはあとで阿部の方から詳しく説明があると思います。

21世紀に生き残れる苓北町の為に、我々は、まちづくりをどう考えていったらいいのかというようなことを投げかけました。今度はそれを町民全体に広げて、２回目のワークショップやりました。その間にわたまちラウンドテーブルがありました。申し訳ありませんが、これはですね、私と阿部同時に海外出張に出かけておりましたので、説明できませんでしたけれども、ラウンドテーブルで少し中間報告をしたということになります。

それから夏の方に盛り上がりを持って来まして、オリエンテーリングをやったり、建築家ゲームをやったり、大学生をまちに呼んで建築家ゲームをやったり、そういうことをやってきました。それをやりながら条件を確定していって、ぎりぎりですね、プレビューを先週の月曜日に何とか終わらせて、今日ここにいるということになります。

それで、私たちのプレゼンテーションはちょっと違う形になるかと思いますが、僕たちが最初に考えたのは、ワークショップをやったり建築をデザインしたりということは、当然非常に大事なんですけれども、それをやるための土壌といいますか、前提条件をどういうふうに考えていったらいいのかということを、まず最初に考えました。通常のワークショップというのは、こういうところで建築をどうして作っていったらいいのかということで、ポストイットに貼ったり、模型を作ったりということを考えます。しかし、私たちはどうもその考える共通の基盤といいますか、これは社会学者のハーバーマスがちょっと難しい言葉で公共圏と呼んでいますが、そういったものがそう濃密に確立しているわけではないだろうということで、まずこれを土づくりから始めようと考えました。これはある意味で非常にリスキーなんですけれども、１年ぐらいで建築を上げる、しかも住民の皆さんの声を聞きながら。

私どものプロジェクトというのは、これを作れというのが最初になくて、町民の皆さんがホールのようなものを欲しいとか公民館的なものを欲しいとか、その場所も４カ所ぐらい検討地があり、条件すら明確に決まっていないところで、何を一体議論していったらいいのかというところから始まりましたので、それをまず21世紀に地域に暮らしていくっていうことは、一体どういうことなんだろう、難しく言えばですけれども。それをどういうふうに次の世代につ

なげていけるんだろうということを考えたわけです。

それで私どものグループが参画して、刺激をするといろいろな活動というかアクティビティが起きてくるわけです。アクティビティがこうやって起きてきて、公共圏が拡張していく、そうするとはじめて具体的なスペックについて語れるような地盤ができてくるのではということで、あえて回り道を取っています。そこで最初にやったのは、先ほど申し上げたような町民、町役場のスタッフとのワークショップですとか、町民とのワークショップ、いろいろなまちづくりオリエンテーリングということを、ぐるぐる回って我々がそれを刺激するというような役割を果たしました。

今度は刺激すると、まちの思いというのがいろいろ顕在化してまいります。それをいろんな思いを今度は収集します。収集して、それとは別にいろんな人口変化の分析など、いろんな分析をかけておりまして、外のパネルにも示してありますが、人口動態の偏向、町の財政事情、その他あらゆる施設型のシュミレーションみたいなものをかけながら、ここで案をつくっていきます。それを庁内にかけながら、要するにそういう政治行政権ですね、その中でチェックをしていきながら動かしていきました。

それによって、こういうふうにようやく公共圏にもう一回差し戻すような形のものができてきて、検討を経て、ぎりぎり滑り込みでなんとか間に合ったんですけれども、最終的にはこの案でまずはよいのではないかという町民の皆さんの支持をいただいて、この場におります。

【阿部仁史】

我々が行いましたワークショップには、大きく３つの狙いがありました。１つはニーズや意見といった、その情報の収集をすることです。２つ目は人や物、人的物的資源がこの町の中でどんなふうにあるのか、例えばこういったアクティビティに対してキーパーソンとなり得る人材がどんなふうに、どんなところにいるのか、そんなことを調べることがあります。

そして３番目に、先ほど小野田の方からあった公共圏、それを拡大する潜在的なニーズが、持っていらっしゃるポテンシャルとして町、個人が町や政治といったものに関わっていきたいという意識があるはずでして、それを刺激してあげて公共圏を拡大する可能性をつくったこと、以上、この３点を下にワークショップを５回行っております。

１回目のワークショップは、まず最初に役場の若手の方々と、その中で何人かのキーパーソンになり得るような、そういう人材に出会っております。

その次に、今度はその役場の方々をコアにしながら地域の各層、中学校、高校生、それから学校の校長先生ですとか、老人会の方、そういった方々とのワークショップを行っております。

〔次のスライドへ〕

そして次に、常に話題の中心にあったのは、役場跡地をどうするかということでございまして、そこで役場跡地、志岐地区というところにあるんですが、その住民の方々とそれから６つ

の大学、近畿大、九大、熊大、芸工大、東北大、東北工業大学の学生たち、それとその住民の方々で、志岐地区周辺のオリエンテーリングをしながらいろんな意見を集めたり、いろんな物を見たりといったワークショップをしております。そして、最後にその学生とその第１回、第２回を通じて出てきた役場のキーパーソンの若手の方々と、その方々に実はホスト役、お兄さん、お姉さん役になっていただいてて、どんなふうにその志岐地区のその役場跡地を使っていくべきかといった、その案を作っていただきまして、それを住民の方にプレゼンをしていくといったことを行っております。〔次のスライドへ〕

ワークショップを通じてのそういった試みというのは、いわば地面から周りを眺める、虫の目の視点だったと思うんですが、同時並行的に鳥の目からというんでしょうか、俯瞰的視点から町を眺めるといったことを様々させていただきました。

その結果として分かってきたことというのが、本渡と富岡いうまちがこの苓北町の地域にあるんですが、ここを結ぶ軸が大変大事な軸になってくるんではないかということです。それはいわゆるある拠点間を結ぶ非常に長い距離、大量の情報ですとか人が移動し得るそういった軸、ネットワーク軸と仮に呼んでいますが、そういったものがどうも強化されていくべきではないかと。ちょうど、それに直行するように、もう少し小さな集団を相手にしていくようなコミュニティ軸といわれるもの、こういったものが仮想されて、この２軸をどうにか強化していくことが、そのまちの将来の発展においては大事なんではないかといったことが考えられてきます。〔次のスライドへ〕

そういった考え方を元に、まちの将来の戦略みたいなものをいくつか構想していきます。まず、ネットワーク軸強化のために、以上ここに５つ上げていますが、アクセスの整備、環境資源の充実強化、滞留拠点の整備、ネットワークの整備、バックアップファシリティの充実、このような５点を考えています。〔次のスライドへ〕

それに対する形でコミュニティ軸強化のために日常的な集会機能、イベントの充実、対情報化対応機能、知的資源の収集と発信、対流会得のための環境、そういった軸を中心として自分たちの生活を価値あるものとして再発見、楽しめる場とする方策、そういったことをコミュニティ軸を中心にやっていきましょうというふうに考えています。そしてちょうどその志岐地区の敷地といいますのが、このコミュニティ軸とネットワーク軸が重なる、ちょうど交差点の位置にほぼ一致しております。

そういったネットワーク軸とコミュニティ軸という、そういった二つの対概念が出てきたわけですが、住民の方々とのいろんな話の中でも、要はネットワークという非常に広域な方に目を向けられる方と、コミュニティというそれと反対の方向をお持ちの方と、それぞれいらっしゃいました。それを代表する意見として出てまいりましたのが、要はネットワーク的な観点からは、どうしてもあの敷地には文化ホールが必要であるというお考えです。

我々、とりあえずその文化ホールがこの規模のまちにおいて、どのぐらいの規模であれば有効なのかという非常に単純な分析を行いました。そうしますと、この図からいきますと、ほぼ158席の文化ホールというのが効率的であろうという結果になっております。

〔次のスライドへ〕

それに対しまして、そのコミュニティ的欲求に対する考え方として、生涯学習センター的なものがあるだろうと、そこで県内の整備状況から、例えばどういった規模の施設が必要なのか、例えば図書館的な機能を含めるとしたら、どの程度の規模のものが必要かといったことを主体にしております。

要は虫の目、鳥の目、両方の観点から一体この町が、実際にはどういったビルディングタイプを必要としているのか、この場所には何が建てられるべきなのか、そういったことを洗い出していって結果的に一つの理念的な施設のダイアグラムが出てきます。〔次のスライドへ〕

ここに出ていますけれども、要はイエローの部分がコミュニティといったものに対応するもの、そしてグリーンの部分がネットワークというものに対応するもの、これはキーワードとして我々が仮定したものではありますが、そういった二つの機能が同時に介在し得て、かつ全館がコミュニティあるいは全館がネットワークといったように、双方の機能を合わせ持って、ちょうど電気とかモーターのようにアクティビティを活性化していくと、そういった方法があるのではないか、そういったことで、新しいビルディングタイプの提案をしていこうというふうにしています。

【小野田泰明】

それでサイトの関係なんですけれども、これが苓北町、ちょっと見にくいんで大きい模型を使ってスタディなんかもしています。先ほど阿部の方から説明がありました志岐地区というのが、このエリアになります。ここら辺が海になっていますが、こっちが先ほど特徴的な半島、富岡半島というのがあり、その半島に行く道というふうになっています。

それで計画地がここです。旧役場跡地という所で昔の町の、歴史的記憶を留めるような場所、町の中心的な小学校、志岐小学校と敷地的には連続しています。新しく建てられたこの場所から移転した役場がここにあります。町を貫く国道がこういうふうにあります。最近建てられたコミュニティセンターや、そういった文化施設群がこっちにあるというような地勢の中で、どういったふうにこの場所に、先ほど阿部の方から説明があった機能、ファンクションを建築化していくかというふうに考えました。

その前にですね、もう１回実際のニーズといいますか、コミュニティの中でどれぐらいの集会ですとか、どれぐらいの文化的なことが行われているかということをチェックしました。これがチェックの調査の結果です。それをもとに設計条件をこのようにつなぎ合わせていきました。

その設計条件を実際に建築化したのが、これです。まず、ここにネットワーク機能を受け持つようなホール部がございます。200席未満の小さなホールですが、ステージと、この最初のフロアの高さを同じにしまして相互に拡張できるようにしたりとか、後ろの方、これはあとで説明しますが、開いております。その開け放しのホールというようなことになっているとか、後で説明しますが、このホール型、施設型についてもフライタワーがないワンボックスの施設であるとか、そういったところで様々な特徴を持っています。

それと対応しまして、こちら側のコミュニティ側に大きな情報モールというのを作りまして、これは廊下でもあり様々な町民が入り込んできたりとか、ホールと時には一体になるような構成でありながら、こういった情報機器が、こういうふうに並んでいますけども、そういったものを出してＩＴ教室なんかも開けるようにはなっています。それはここの中に引き込むことによってセキュリティも完備して、ここらへんは雑誌が並んでいます。それと、先ほど量を集計しました集会室になります。実際のコミュニティにおける集会なりサークル活動の密度の方から導き出した、最低このぐらい必要だろうというのをここに連続的に設けております。

それとあと事務スペースですとかオープンキッチンとか、すべてがここに向くように非常にコンパクトに作っております。中でも特徴的なのは、この金魚鉢のようにあるんですけれども、ボランティアサロンということで建物を中央に配置してネットワーク部分とコミュニティ部分を連結する、先ほどまちのワークショップの方に出ていた、非常に若くてやる気がある、だけどもどういうふうに自己発言していったらいいか分からないというようなことを、飲み会でも相当飲んで議論したんですけれども、そういったみんなに、ここでまちの規格というか作戦本部のような形、金魚鉢のような形で、ちょっと一段高くなってまして、作戦本部を作ってもらうというようなことです。これは催しをやるときには、ここに稼働壁が入りまして閉鎖されまして、こちらの調整室のサポート室として働くというようなことも考えてます。その他にプラグインスペースいうことで、将来的に倉庫や小屋の増設が可能なようなスペースも考えております。

こういうことで、全体的にまちの有志の積極的参加を誘発したり、コミュニティを発生させる中心的な空間とか、喰ったり飲んだりすることの飲み会をやったり、あとしゃれたイベントなんかもやれるようなことで、カフェを併設したり、ワークショップで抽出した様々な機能が展開可能なようにビルディングタイプを設計しています。

それでホールのタイプの話ですが、先ほど八束先生の方からの説明とも若干似ているような感じですけれども、どうもやはり従来型の大きな多目的ホールといいますか、ステージと客席とホワイエと、それぞれに機能は充足している、独立したスペックの要求を満たしてはいるけれども、なかなか全体としてみたときに、地方では稼働率がどうしても低くなってしまう。稼働率だけがすべてではありませんけれども、なかなか上手く利用できない。では、その地域の

中でカスタマイズするためには、どうしたらいいのかということで、多様に複合する空間ですね、ステージが、この床が一体化している。かなり傾斜が急になっているんですが、それによって空間の一体感を持たしております。

まちの若い連中なんかの話では、ライブハウスなんかもやってみたい、企画してみたいというような話をしているんで、ここはライブハウスにもなるような照明スペックを考えて、カラオケ大会、ライブハウス、簡単な小劇場、その他ピアノコンサートとかダンスなんかにも、床同じでしたんで使えるようにしたらいいのではというようなことも、ここは稼働壁を持ち上がれば、こっちと一体、コミュニティ側と一体化になりまして、若干、大規模な集会なんかはここでやんないで、ここで座りながら車座になってやろうというような、そういったことも可能になるだろうと、こういうような施設型を考えました。

【阿部仁史】

大体、以上で私どものプロジェクトの現在の進行状況はおしまいなんですが、実際には、これからその施設タイプに対してどうやって使っていくか、あるいはどんな使い方が可能なのか、そういったワークショップを続けていく必要があると考えています。

苓北町長から今日は来れないんだけれども、ということであずかってきたコメントがありましたので、一応お見せします。「来世紀に向けて、我が町が定住文化の拠点として根ざしていくのか、グローバル化の中で埋没していくのか、今がまさに転換期であるということが、建築家の先生方の丁寧な調査を通して明らかになってきました。その結果を踏まえて、苓北町での『くまもとアートポリス』の展開にあたって、町長として私が考えたのは、地域が未来に向けて本当に必要としているもの、身の丈にあった予算の中で実現していくことが重要なのではないか。つまり将来に向けて、地域が本当の意味で維持運営できる施設こそ、新たな世紀を迎えるにあたって転換期を迎えようとしている、我々のような自治体が求めているものではないか、ということでした。本プロジェクトは、そういった問題意識に資するものと考えております。苓北町長田嶋章二」というお言葉でしたので、お伝えしておきます。

【曽我部昌史】

どうもありがとうございました。

それでは続きまして最後になりますけれども、蘇陽町のわたまちで岡河さんにお願いしたいと思います。岡河さんは、パラディサスアーキテクツを主宰すると共に広島大学で教鞭を執られていらっしゃいます。では、よろしくお願いします。

【岡河　貢】

岡河です。僕は蘇陽町の馬見原地区のまちづくりのお話をします。僕の担当の場所だけが、実は今までの私たちのまちづくりと違いまして、いわゆる施設計画といいますか、ホールを造るとか住宅を造るとか体育館を造るとかというのと少し違いまして、町そのもの、つまり、ま

ちづくりを考えて下さい、という課題でした。私は、ちょうど右に見えるのが馬見原の風景なんですけれども、このまちは昔、日向街道のちょうど熊本から宮崎へ行く、ちょうど山の中間で宿場町として大変に栄えたところだというふうにお聞きをしました。昔は、造り酒屋が江戸時代には16軒もあって、一番栄えたのは明治から大正にかけてだそうでして、歌人の若山牧水が「馬見原はしゃれた町なり」という言葉を残しているんですね。当時のとてもハイカラな芸術家がしゃれていると印象を述べています。どこの町かは忘れましたけれども、「近くのなんとか町は汚き町なり」というふうに言っていますから、よっぽどきれいだったんだと思うんです。その当時の写真を見ますと、白壁の土蔵づくりの屋根の上に、物見台のようなものが乗っている家がたくさんありまして、さぞやそれがそのまま残っていたら、おそらく現在ではまち並として文化財になるような、そういうまちだったんだろうというふうに思いました。

古いお宅で八代屋さんというお宅が残っているんですけれども、そこの江戸時代の文書には、八代のお殿様がお金を借りに来たという証文が残っているぐらい経済的にも非常に栄えて、文化的にもしゃれたまちだったりというぐらいのまち並みが残っていた場所らしいんですけれども、昭和に２回大きな火事になって、まちへ行ってみますと今はもうほとんどそういう建物は残っていません。１、２軒、とても素敵な土蔵づくりの建物が残ってます。これはお祭りの時の風景ですけれども、木造の２階建のモルタルの商店街というのがありまして、周りは自然に囲まれている、そういう町でまちづくりを考えました。

私は、実はこのまちを見たときに、ここに商店街があるわけですね。それから川が流れていって、これはすごくきれいな水が流れている川で、ここには青木淳さんがデザインされた、橋の下にデッキがぶらさがっている風景を見たりするのにすごくいい橋がアートポリスでできています。僕自身はちょうどこの商店街の周りの地区を考えることになりました。少ないけれども、古くて良いものが残っているものはそのまま残して、上手にそれは保存しながらまちをつくろうと思いました。

それから、ちょうどまちづくりをするのが400メーター角ぐらいの集落でして、真ん中に通りがあって、裏には住宅がありまして、住宅の間に茶畑が中に混じって点在しています。そしてその周りは自然が、熊本の自然が残っています。

こういうまちを考えたときに、僕は何となく未来の都市をここで考えようと思ったんです。不思議な話なんですけれども、それはアートポリスというのは20世紀の後半に、デザインによって地方から新しいまちづくりをしようという志がある試みだというふうに認識していました。その志を引き継ぎまして、田舎から未来都市が作れないかというふうに思ったんです。

それは未来都市のイメージというのが、私が考えるには20世紀的な未来都市というのは全てが人工物で被われて、おまけにインダストリアルなテクノロジー、工業的な技術が空間を覆い尽くす、そういうのが20世紀の未来都市のイメージだったんですけれども、僕は蘇陽町馬

見原に来て、自然や人工物が混在をして、ある程度の人達が集合して住んでいる、そういう状況や環境というのが、ひょっとしたら未来都市なのかも知れないと思ったわけです。しかし現状のままでは未来都市にはならないですから、この中でどういうふうに未来都市を作ろうかというキーワードとしてフラワーズ、花を植えるみたいに施設をいくつか提案をして、テクノロジーの花を植えて、これを未来都市にしようというふうな提案をしました。提案をしながらワークショップではそのまちの人達にご意見を伺ったり、やりとりをしながら作っていったわけです。

それからもう一つ僕がまちづくりということでここで提案をしたのは、まちをまちに住んでいる人達が可能な限り作る、施工屋さんに作ってもらっても良いんですけれども、そうではなくて、まちというのは住んでいる人々が作るもので、20世紀の都市というのは、例えば東京の新都心を見てもそこに住まない人が作るわけです。そして住む人は与えられたまちに住んでいく、そうではなくて、住んでいる人が自分らの手で作れるものは作っていきながらまちを作る。そういうようなことができればと、提案をしました。ですからワークショップに参加していただくだけでなくて、私のチームの「私たちのまちづくり」というのは使い方も含めて、作るのもある程度まちの人達にやっていただければと思い提案をしました。〔次のスライドへ〕

これが同じ図なんですけれども。〔次のスライドへ〕

それで、いくつかのこういうストリート、つまり馬見原がなぜ都市であるかということは、ここに商店街、つまり都市的な空間があるということがとても大事なのです。この通りについて自分たちの手でできるまちづくりということを提案をしました。〔次のスライドへ〕

現在のまち並は木造で、モルタル仕上げでありますとか、工業製品で外側が貼ってあるようなものがほとんどです。昔はおそらくこのお宅も、土蔵づくりの立派なお宅だったと思うんですけれども、火事の後はこのような建物が町並をつくっています。そこで看板を、この辺りは木の生産地ですから、木製にして、なおかつ日本には篆刻看板というソフィティスケートされた看板の芸術がありますから、そういうので電気屋さんも畳屋さんも荒物屋さんも、こういう篆刻看板をそれぞれお作りになって、それでみんなで商店街の特色にすると、けっこう良いまちになるんじゃないかと思うのです、しかも自分たちの手で作ったような感じのまちになるんじゃないかなと思うのです。看板のデザインにアーティストに参加してもらっても、もっと楽しいのかも知れません。〔次のスライドへ〕

次に、古いものは残そうという提案です。商店街のすぐ先に、明徳山という山があります。そこに立派な石段がありまして、昔このまちがとっても経済的に豊かだった頃、このまちの旦那衆が鳥居をたくさん寄進をされているんです。その鳥居をライトアップして、まちの都市的な施設、つまり、視点の施設、そういうものにしたらどうかという提案です。これもあまりお金かからずにできます。夜、僕はシャンゼリゼで凱旋門が光っているのを見たときに、「ああ、

やっぱり都市っていうのはこういうものだな」と思ったことがあるのですが、日本で凱旋門を作るわけにはいかないので、古い宗教施設を光らせて都市施設にするというような提案をしました。〔次のスライドへ〕

おそらくこういう風景になります。〔次のスライドへ〕

地域内のいくつかの場所でこれらは提案するんですけれども、基本的にはルーフ、屋根を作るだけなんです。パブリックルーフという名前を付けています。この場所は商店街に面したところに150坪ぐらいの空き地があります。〔次のスライドへ〕

ちょっと、これはお祭りの時の風景ですが、ここにできればジュラルミンみたいなリサイクルできる、そういう材料のリブ構造の屋根で、パターンを、お花、花畑みたいなパターンにした構造で、上にガラスなんですけれども、ガラスとガラスの間に太陽電池を挟み込むことができる技術ができまして、そういうガラスを上に使って、真下に強化ガラスで少し色が使えればと思うんですけれども、そういう発電できる屋根を作りまして、この下の使い方はいろんなことに使っていただいて良いんですけども。〔次のスライドへ〕

そして夜は、この屋根全体がまちの照明器具になります。そういう光る場所というのを作るという提案です。この場所につきましても、ワークショップでいろいろ使い方を考えていただきました。例えばこれを劇場のように使いたければ、これから劇場のような壁を作ればいいんだと思いますし、それからここをカフェのような、休憩所のように使いたければ、そのような壁と設備を作ればよいと思います。もし、可能ならば、住んでいる人達が勝手に作っていただければというふうに考えています。夜光るというのは、都市性を作るということです。田舎に行って、どうして都市じゃないのかなと思うのは、夜暗いんです。都市というのはやっぱり電気のエネルギーを使えるようになって、夜明るくなって欲しい。ただ、その電気を発電所から買った、電気を使うという浪費型の20世紀の浪費型の都市性ではなくて、可能ならば昼間に貯めた電気エネルギーを夜放出して光る、そんな都市が21世紀的な都市ではないかと思います。ある意味では植物のような、そういう光合成じゃないんですけれども、電気合成、エレクトリックパワーのエコロジカルな合成みたいな、そういうことをするルーフをできればまちに何ヶ所か作っていきたいと思います。これは150坪ぐらいのところですけれども、イベントルーフという形で提案をしました。〔次のスライドへ〕

出来たばかりの町営の団地の入り口の両側にも同じようにルーフを提案をしました。〔次のスライドへ〕

これも夜こういうふうに光ってくれると、団地へ帰る人達がちょっと楽しいし、昼間は商店街に来られた買い物に来た人がここにベンチでもあれば座っていれる、夜光っていればその下で夕涼みをしてもいいと思います。そんな屋根を提案しました。〔次のスライドへ〕

これは五ヶ瀬川という川が流れているすぐ側に、お茶畑がありまして、そこを親水庭園にし

ます。この馬見原地区で一番ある意味では自然と親しく付き合うことができる、そういう場所なんです。〔次のスライドへ〕

こういう場所にお花の形をしたルーフを作ります。これは夜光っている風景なんですけれども、桜の季節だと、こういう風景が未来の都市風景であるというようなことをイメージして作ったＣＧモデルです。ここはピクニックの時に屋根の下でお弁当を食べる場所に使ってもいいですし、お茶畑がありますからお茶会をされても、屋外の素敵なお茶会ができるんではないかというふうに思います。〔次のスライドへ〕

これも畑の中にルーフがありまして、昼は太陽を受けて、夜はそれが放出して屋根が光っています。そういうテクノロジーの花が自然の中に点在しています。そういう提案です。〔次のスライドへ〕

これも敷地は商店街の近くにある場所なんですけれども、50坪ぐらいの敷地なんですけれども、今は古くからのここに住んでおられる方が持っておられる敷地なんですけれども、場合によってはまちづくりのためにここを提供してもよいというお話があるということで、計画しました。〔次のスライドへ〕

これは、小学校がありまして、今ちょうどこの小学校は新しい立派な小学校に新築中です。〔次のスライドへ〕

その周りに、いっぱい子どもたちが通る道に、こういうルーフを道の脇に作ってあげるという提案です。〔次のスライドへ〕

暗くなった冬なんかはこういうふうに下校するときは光っていれば、子どもたちも夜道が恐くないでしょう、まちの照明器具として光っています。このような計画をまち全体にちりばめるという提案です。ここでは馬見原地区全体に新しいエコロジカルな、自然共生型のテクノロジーを使ったお花をいっぱい植えて、テクノロジーの花畑みたいな、そういうテクノロジーの屋根の花畑みたいな、そういうものをこのまちに提示することで、田舎から未来都市ができればというふうに思って提案をいたしました。以上です。

【曽我部昌史】

どうもありがとうございました。

これで６つのわたまちの発表が終わりました。